変態十二史 第四巻

変態人情史

全

187
510

187-510
1200800074996

Kodak Gray Scale
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak

変態人情史

全

187
510

井東憲著

変態人情史 全

變態十二史 第四巻

發行所 文藝資料研究會

凡例

○ 本著は、著者が本業の創作のひまに讀んだ種々樣々なる、史書、雜書、珍書等より材料を蒐め、それに一道の脈絡を與へたものである。けれ共、著者が、その方面の專門家でもなく、又、史實の詮索のやり方も何も知らないので、材料は案外新らしくないかも知れない。ただ、いくらかでも新らしいところがあるとすれば、從來の人情的事實に對する解釋の仕方である。

○ 本著は、その特質上、所謂お上の御役人がこわい顏をするやうなところが大分ある。僕は、嫌々乍ら、遠慮しなければならなかつた。この不便の責は、讀者諸賢も共に負はなければならないものらしい。

○ 日本變態人情史と題しても、神代から德川の末期までしか入つてゐない。明治まで詳述する余裕がなかつた。尤も、これだけの小著で、兎に角二千五百余年の史實珍事件が入つてゐれば、さう文句はないと思ふ。但し、少し殺風景だと云はれゝば、殆ど素人の事、讀者これを諒せよと言ふより外仕方がない。

○ この中に狂亂ものが入つてゐないのは、氣が向いた時「日本狂亂史」といふものを書いて見

大正 15. 9. 29 内交

たいと思つてゐるからだ。

○ 僕は、史學者や變態心理學者ではないから、學術的なものは書けない。僕は、僕らしく勝手に書いた。然し、これは、十二史の總論のやうなものになつて仕舞つた。この本の性質上さうなるより外書き方がなかつたのだ。

序

人情とはいかなるものであるか？　これは實に無限にして深刻なる、人生の重大問題である。ちよつと考へると、ひとのなさけだといふことで萬事の解決が着いたやうであるが、それだけでは何となく曖昧だと云ふことになると、もともとが、かたちのない謂はゞ靈異的なものだけに、科學的な說明はつかない。

人情は、概念やなんかではない。

一つの、尊い事實なのだ。

單なる、分析や、解剖や、推察などで、生やさしく說明がつかないところに、人情のつきせぬ面白味と、有難味とがある。

人情は、人間なるが故に持つてゐる生命のまことだ。

生命の輝だ。

涙にまで、純眞誠實な、僕らの生活の火だ。だから、人情の冷却し、薄れた世態を、闇の中と云ふ。

この限りなく、人間的な香情のことを、愛といつて呼んでもいゝ。何といふ、あたゝかい、麗はしい名だ。

僕らが、人間らしい本當の姿で、力強く、健やかに生きると云ふ事は、素裸で、本當に愛し合ふといふ事だ。

そこに、人情の精髓と、唯一無二なる至上の善美が生れる。

正しい、男女の愛、親子の愛、兄弟の愛、友人の愛、隣人の愛、これほど美しいものが世の中にあるであらうか。

さうだ、まことの人情は、輝ける愛である。

而して人情の精華は、戀愛に極る。

謂ところの戀愛は、生命の燃燒であり、生活の飛躍であり、又、新鮮快達なる人生の華だ。

この立場より觀れば、僕ら人間の歷史は、さながら、愛のよろこびと、その鬪爭とそして戀愛の火花の歷史であると云つてよい。人間がこの地上に創生した。それは、人情の生れ出たことだ。

人間の生活は、不斷に進化し、變化し、動いて止まない。人情も亦、世の中の推移變遷と共に、その表現の形を改め、內容を異にして行く。

最初は、單純素朴にして、原始的なりし人情も、時代の――制度、經濟事情、文明的組織等――の進步發達と共に、益々複雜厚重になり、種々樣々に變化して行くのである。

一口に、榮枯衰盛といふ、然乍ら、その中には、感慨無量なる人情の馨花亂花が、あるひは燃え、或は狂ひ、あるひは瘦せて、ひしめき踊つてゐるのである。豈人生の好趣に、驚ろき、尙且つ親しまざるを得んやである。

されば、人情の歷史は、凡ての歷史のうち、最も根本的にして、最も深刻なるものと云はなければならない。

一體、凡ての歷史は、その研究され描かれたる時代の全般の生活に涉つてゐなければ正當でないと共に、その價値が低い。

然るに、從來の日本の歷史の多くは、所謂御用學者が著作したせいか、支配階級者の歷史である。民衆の生活なるものは、我國の歷史家にはまるで、と云つていゝほど忘れられてしまつてゐた。彼の、民衆擡頭の――殊に町人――江戶時代の歷史を編むにさへ、德川一家を主題としてゐるのである。

凡ての歷史がかくの如く權力者支配者の歷史であるからして、僕らは、ある種の特殊研究によつて、風俗史的に、裏面史的に、あるひは文學的に、傳說的に、民衆生活の一面をうかゞひそれを綜合して、やつと滿足してゐる次第である。

けれ共、正史なるものが、頗る偏頗で、無味乾燥であるからして却つて、この裏面史的な特殊研究が內容的な意味で正しく、又、興味深津だ、と、いふことになるのである。

就中　江戸時代の世態裏面史、花柳研究、風俗研究、文學研究等々に臻つては、民衆の生活そのものに接して、正史のつまらなきに比し、うただ感極るものがある。

それは、いかなる時代にあつても、かの權力者の人情は、人爲技巧の人情、そして規則的、僞善的自我的なる、ある手段乃至目的の爲めに強いて拵へ上げたる人情である。

然るに、民衆の人情は、自然の本能そのまゝの發露として、常に純眞無垢であつた。この邊りの消息は『太閤記』『德川太平志』の一つを通讀しただけでも、合點の行く事である。

だが、その正史の人情も、裏面史の人情も六法全書の如く秩序整然と、動いたのではない。

兩者は、常に、闘爭し、錯綜し、時には融和して、歴史を、いよいよ愉快なものに創りあげてゐるのだ。

一方に、武士の義理が問題となれば、一方に百姓町人の人情味が强張される、かと思ふと、一方に女性の貞操が呼ばれ、一方に遊廓があらはれ賣淫が出現する。

武家は、誠忠の殉死は止めても、城下の巷人は、いつかな心中を止めない。人間の便宜のためにあみ出された黄金は、いつの間にやら、その御當人を自殺に導き又人世無情を感じ、佛果のをしへに、諸國巡禮に出づる人あれば、歌舞の菩薩の膝枕に遊蕩ざんまいに耽ける男もある。また下民のいのちは、武士の人切扱丁の影に、犬の尾よりも輕んじられるかと思ふと、武士は町人の黄金の力の前にその刀をにぶらす。

かう、數へて來れば限りがないが、つまり人情が上下交々、綿々として複雜となつたのだ。

ところで、本著の意圖は、これらの歴史——正史、裏面史——に現はれた人情的事實のうち、社會的風俗的、心理的なまなこから、すぐれて變態的だと思はれるものを、年代順に書いて行かうとするものである。

僕が、敢て、變態的なものを選び出した所以のものは、人は昂奮した時その根抵の本性を顯はすが如く、變態的なものこそ、却つて眞人情に深く觸れてゐると思つたからである。諺に言はずや『キ印と變人は物凄いほど本當のことを云ふ』と。

それは、扨て、本著の望みを云ふと、日本の開闢以來より江戸末期までの重なる變態人情的事件の綜合史でありたいのだ。

一面　世相史であり一面閨門史であり、一面男難女難史であり、一面、賣淫史情死史であり、一面、不人情史、そして一面變態風俗史でありたい——まあ、理想を云へばかうである。

しかし、こんな大事業は、僕のやうな淺學の徒の、到底成し得るところのものではない。しかのみならず、かゝる片々たるの著では、やつと概略くらゐしか書けない。

しかし、僕としてはたとへ小著にしろ、日本の古代、近世の、變態人情の精髓を、出來るだけ、くは

しく、廣く、摘出したつもりである。

そして、いささかでも、社會的に、人生的に、示與するところのあらん事を期した。

幸に讀者諸彥にして、紙背の意義を御賢察御味讀下されば、著者として頗る愉快である。

一九二六、六月二十八日

東京、駒澤、竹林の中

著者

目次

第一章　神話時代

一　人情の表裏……一
二　本能的人情の發露……四
三　戀愛の自由と嫉妬心理……六
四　人情の具體的象徵如何……八
五　高千穗時代の過渡期的人情……九
六　女護國の新らしい女……一二

第二章　上古時代

一　變態的史實……一五
二　女裝の問題……一七
三　變態長壽……一八
四　聖代の閨門秘事……一八
五　暴君か優君か……一九
六　自由戀愛の道場……二一

第三章　奈良朝時代

一　唐風人情の潜入……二二
二　佛の無慈悲……二三
三　萬葉の戀愛的迷信歌……二五
四　賣笑婦の出發……二六

第四章　平安朝時代

一　官能的戀愛時代……二九
二　家庭的婦人、文學的才媛……三一
三　棄老の陋風……三二

第五章　源平時代

一　貞操大觀……三五
二　源家の遺傳的慘虐性……三七
三　女難か時代難か……三八

第六章　鎌倉時代

一　武士道は變態心理……四一
二　白拍子全盛……四二
三　變態人情味……四四
四　諷刺詩的落書……四六

第七章　南北朝時代

一　虐げられし女性達……四八
二　代表的淫虐狂……四九
三　心中のはじまり……五〇
四　美術、春畫、公娼、私娼……五一

五　海賊の事……五二
六　自殺の事……五四

第八章　戰國時代

一　亂世の不人情……五六
二　殺人術、慘虐性、淫亂狂……五七
三　淀君の秘密……六〇
四　畜生關白の變態心理……六一
五　眞正直な盜賊……六三
六　妖怪變化現る……六六
七　母殺し、暗殺業、首拾ひ、阿國歌舞伎、遊女歌舞伎……六八

第九章　德川時代（上）

一　家康の無駄骨折……七〇
二　殘忍酷烈の事……七一
三　一揆は人情……七三
四　風俗壞亂の第一段……七四

第十章　德川時代（下）

一　人間は畜類の家來……七八
二　驕奢淫靡の極……八〇
三　花柳人情その他……八八
四　幕末の人情……九四

挿畫目次

女護の島
東大寺の人柱
江口の遊女
あそび
信濃國姥捨山
艶道通鑑の畫
手の長い人
自害の畫
畜生塚
妖怪變化
由井正雪の墓
江戸の湯女
戰國時代の男色
芳町の陰間
江戸町奴喧嘩を賣る
椀久の最後
曾根崎心中
唐崎の夜の涙
變態心中
貴婦人の役者狂ひ
遊蕩兒黄金の雨を降らす
文化文政頃の狂歌師
『蓮華往生鮮血臺』口繪
深川藝者（羽織）
こども
五人廻し（廓の廻し部屋）
娘を鍋で食ふ
親のすねをかぢる

変態人情史

井東憲著

高天原は高いところ

第一章　神話時代

一　人情の表裏

日本歴史の神代なるものは、全々希臘神話の燒直しである、といふ人がある。これは例の木村鷹太郎氏だが、氏の謂ふところに依ると、天照大御神は希臘の女の神樣アテイナで、須佐之男命、大國主命を初めとして神代の英雄的天才は、みんな希臘型の人格者であるといふ。

そして、神代の主柱點たるかの高天原は、實のところは日本ではなく、小亞細亞のアメニヤ、アヌスツヤ、バビロニヤ、アリアナ等々であつたと言ふ。

然し、さうした雲をつかむやうな詮索は、閑と金のある篤學者に讓つて、僕は神話通り、高天原は根の國と對立した、高いところとして置かう。

日本の歴史的事象が、少しでも明らかになつて來たのは、神武天皇時代からである。

高天原の三神

その有史以前に、かの高天原に、天御中主神、高御彦靈神、神御産靈神といふ三神が尊座した。その子孫に伊邪奈岐、伊邪奈美といふ若い男女の二神が居つた。

男女の區別のはじまり

然し、天地開闢の時の神は「隱身にして而かも獨身で」未だ男女の差別はなかつた。この差別の發見されたのは、伊邪奈岐、伊邪奈美の二神が、天の御柱を廻つて夫婦のかためをしてからのことである。

美斗能麻具波比

それは扨て、天神は伊邪奈岐、伊邪奈美の「二神を召しこの漂へる國を修り固めよ」と宣給つて、天の瓊矛を渡し給ふた。二神は天神の畏き仰に勇み進んで、天の浮橋に到り、橋の上に竝び立ち、混溟たる滄海を望んで『この底に國のなき事よもあるまじ』と、天の瓊矛を執つて、渾沌たる霧を搔き分け給へば、果して矛の先より滴潮が凝つて磤馭盧島と成つた。その男女の二神は、天命を果したのを大いに悅び、直ちに島に下つて、天の御柱を立てて八尋殿を作り、その御柱を廻つて夫婦の固をなし給ふた。

戀愛創生

この時、伊邪奈岐神は御柱を左りから廻り、伊邪奈美神には右から廻らせたが、二神が相逢ふた時、女神が先づ男神の顏をしげじげと眺給ふて「阿那邇夜志愛袁登古袁」(ア、いゝ男といふ意味)と思はず感激して呼ばれた。と、男神も亦女神をつくづくと見入つて「阿那邇夜志愛袁登賣袁」(ア、好い女よといふ意味)と呼び給ふ。

自由爽快なる女神

後年の日本の女性は、いやに消極的で、精神的片輪で、しかも因循姑息で不愉快だが、神代の女性は、その發情のそもそもから自由濶達で、純眞で、健康で、素晴らしく爽快だ。

かくの如くして、男女の二神は夫婦の契を結ばれたが、伊邪奈岐神が直覺的に氣がつき悔恨したるが如

神の流產

く女が先きに戀の言葉を言つたものだから、二神の間の御子は、水蛭のやうな骨なし子だつた。これはどうやら開闢最初の流產といふところであらうが、二神は葦船に入れて流し給ふた。が、次に生れ給ひし御子も又完全ではなかつたから、二神は深く心痛され給ひ、高天原の天神に御指圖を乞ふた。

愛の言葉は男より

で、天神は、太古を占はれて、愛の言葉のやり直しを命じた。

これに依ると、古事記に書かれた時代は、戀愛の意中の表現は、先づ男子からなされるのが常識で、女性は消極的でなければならなかつたのだ。然し、それは、時と場合と當人の性格の問題で、必ずしもこの順序でなければならなかつたのではない。

自由戀愛

たとへば、因幡の八上比賣が、八十神の結婚申込に肱鐵砲をくれて「われは汝等の言葉を聞かじ大穴牟遲神に嫁はむ」と、頗る快活に自分の戀心を發表し、大穴牟遲神(大國主命)を戀の勝利者としたなぞは、この順序を無視した自由戀愛である。

ところで、又二神の話にもどるが、二神は天神の仰せに從ひ、更に御契を結び給ひ、これより大八島國の國土經營の任に當つたのである。

人情の表

そのうち、二神の希望の如く、天照大御神を初めとして、月讀尊、素盞嗚尊の三神が生れた。

だが、伊邪奈美神は、火の神を生み給ひし時下腹を火傷をしたのがもとで、黃泉國に行つて了はれた。

人情は永遠に美し

すると、伊邪奈岐神は、女神が戀しくて堪らず、黃泉國まで訪ねて行き、めんめんたる愛情を以てかきくどき給ふ。女神も又男神の來訪を『あな悔しや、愛しき吾夫、など早く來まさぬ』と怨みまで述べて喜び給ふ。が、男神は女神が、黃泉國の神達と歸宅の相談をしてゐる間に、女神と固く約束した『ゆめ吾が姿

男神の破約と女神の立腹

離別は人情

を見給ふな』と云ふ言葉を忘れ、餘りの戀しさと待遠しさに。ひそかに女神の家を窺ひ給ふ。卽ち、男神は『左の鬟に刺し給ふ櫛の大齒を折りて之れに火を點し、これを頼りに奧深く進み給ひて』女神の餘りにも淺猿しい姿を見て了はれたのだ。身體一面蛆虫におほはれた女神は、今し八人の無禮な雷神共（異族の長）と共に、何か密語をなされ給ふ。男神は、餘りの光景にあきれ果て給ひ、いそいで逃歸らうとするうちに雷神共に見つかつて了ふ。又、女神は男神が我身を見給ひしと知り、あれ程堅い約束をしたのに吾れに辱をかゝし給ふかと、大いに怒り給ひ、黃泉醜女を遣はして男神を追はしめ給ふ。この時の伊邪祭岐神の逃方は、頗る原始的で又藝術的だ。そして其結果は、女神軍と男神の猛烈な戰ひとなつたが、たうとう女神軍の敗北に來して了ふ。で、伊邪奈岐神は、黃泉平坂の千引岩をへだてて、自ら追ひ來た女神を離別して了はれる。

本能生活は詩なり

この二神の物語は、別に變態人情といふほどのものではないが、男女の生活の原始的な姿の表裏が窺はれて面白いと思つたから、書いて見たのだ。殊に、最後の方に至つて、女神が黃泉國で雷神共を相手に女王振りを發揮するところや、女神自ら戰士となつて追駈けて來るところなぞは、神話時代の夫婦關係の自由さや、又女性の社會的地位や實力なぞが窺はれて、深く味へば却々興味がある。

二　本能的人情の發露

素盞嗚尊は、勇猛無比な英雄的天才で、原始的本能生活の痛快な實行者である。しかも、そのやる事は

素盞嗚尊の慘虐性

腕白のうちに、多分の詩味があるから面白い。尊は餘りに自由奔放なので、父神には勘當を喰ひ根の國へ追やられ、又いとまごひに行つた姉神からは頭から誤解疑視を受ける。が、その詩人的直覺力を以て、悠々と姉神、天照大神の疑を晴らすことの出來た尊は、例の負けぬ氣と暴行癖を起し給ひ、姉神の御領の田を滅茶苦茶に荒して了つたり、清淨な御殿へ糞を散らしたりし、その揚句の果には『班馬を生ながら逆に剝ぎ血のつきたる儘』神に奉るべき御衣を織り居給ふ姉神へ叩きつけたりする。

天地常闇

そこで天照大神は、最早堪え難しと天の岩屋に入り、內より戶を立てて籠り給ふ。何しろ、光華明彩六合に照り徹り給ふ靈異の神が、天岩屋に隱れた切りなので、世は兇徒に亂れ天が下は常闇と化す。

罰金と體刑

この時、素盞嗚尊は、罰金刑と（千位置戶の祓）體刑（髯を切り手足の爪をはがす）とに處せられ、たうとう根の國へ放逐される。

神々の相談會

茲に於て八百萬の神々は天安河原に集つて、どうしたら元の光明平和な世の中になるかと、鳩首相談する。だが結局、高皇產靈神の御子なる思兼神の思慮分別に富んだ妙案によつて、例の岩屋の神樂を演出することになる。

天鈿女命の亂舞

この時、多數の雞を驅集めて天岩戶の前で鳴かしたのも面白い計劃だが、天香山の男鹿の肩を全拔にして持つて來たのや、八咫鏡を大神の御顏の前に差出したのや、時の妖艷な舞踊家天鈿女命をして『天香山の篠の葉を持ち、裳の緖を押しさげて乳房を露はし、空槽を伏せて神憑せし如く祝詞につれて狂舞させたなぞは、凡ゆるかたちの本能的人情がその儘に現はれてゐて、たしかに天眞な妙案だ。

本能的人情の飛躍

戀愛は本能のまゝ
よばい、美女掠奪、姦通
結婚の形式
駈落のはじまり
史實の裏

三　戀愛の自由と嫉妬心理

古事記時代にあつては、戀愛も結婚も凡てが本能的自然的衝動的で、何の堅苦しい道德觀念もなかつた。戀愛は性慾の高調であり、結婚や離婚はその折々の衝動のまゝで、附くも離れるも當人達の自由であつた。又、末婚者と既婚者との區別の如きも、戀愛の前では何の支障にもならなかつた。

――かの素盞嗚尊が、出雲國簸川の上流で、足名椎、手名椎の女稻田姫を、八頭八尾八谷八山の大蛇（實は八人の異族の長）から奇計を以て救ひ、姫と目出度結婚したといふ物語は、稻田姫を美女掠奪の常習者の手から奪ひ返したといふことである――

だが、史實に現はれた結婚は、自由結婚は少なく、大抵、親のゆるしを得るとか、お互に結婚に對する順序を踏むとか、妙に形式を重じてゐる。それは、大國主命が、根堅洲國で須佐之男命の女須勢理比賣と戀愛に陷ちた時でも、須佐之男命の許しが出るまで數度の難業をしてゐることでもよく分る。そして最後に、二人は駈落の手段に訴へた時、やつと許されたのだ。

ある國學者に言はせると、かくの如く史實の結婚がその形式を可成りに重視したといふ事は、我國民性特有の美德で（男性は責任を重じ、女性は從順）あると云ふが、史實はさうか知らないが史實にない一般の民族は、自由結婚（そんな意識さへあつたかどうか疑問だ）を大いにやつたに違ひない。そして、それか

大國主命の女難
神世からなる女の嫉妬
最初の戀愛の犧牲
夫婦喧嘩の濫觴
嫉妬は人情美

ら生ずる喜悲劇も、大いにあつたにちがひない。たゞ、史實がないから證明出來ないだけの話だ。

大國主命は神代第一の好男子で女難家だ。何しろ、其頃の男子の唯一の身上だつた武勇が絶倫で、其上になかなかの好男子で、而も人格者で人望があつたのだから女に惚れられるのも無理はない。因幡の絶世の美人八上比賣は、數十人の命の兄神の戀情を袖にして自ら命の懷に走つた。又、根堅洲國に至つては、須勢理姫といふ情熱的な佳人に戀しられて、種々樣々な苦行の末、結婚された。又、越の國に至つては、沼河比賣といふ美人と深く契る。だが、命は、それと共に、嫡妻須勢理姫の嫉妬のため、さんざんに苦しめられる。

折角、因幡から遙々訪ねて來た八上比賣は須勢理姫のはげしい嫉妬に堪えられなくなつて、命との間に出來た可愛い御井神を木の俣に括りつけ、いづれへともなく姿を消して仕舞つた。この事件なぞは、人情の表裏の板ばさみに會つた女性が、自らの戀愛を犧牲にした最初の例であらう。

又、命は、沼河姫との戀が成立つと共に、いよいよ須勢理姫の嫉妬が加はつたので、どうにも困り果て給ひ、夫婦喧嘩の末、離別の目的で倭國へ出發しようとする。けれ共、これは須勢理姫が折れて出たので、兎に角仲直りが出來た。

抑も、この嫉妬といふ角の生えた感情は、愛情の變形したもので、變態でも何でもなく、寧ろ人情の昂奮美だ。若し、嫉妬をもたない男女があるならば、それこそ正に變態である。しかし、嫉妬が强い程愛情が强いといふ事にはならない。餘りはげしければ、確かに變態だ。又、この須勢理姫の嫉妬の原因を社會心理的に觀れば、當時の一夫多妻的な男性の性的自由に對する、結婚後の女性の本能的反抗だと云ふ事も出

高天原の女優
女探偵の效能
怪物猿田彦
乳房の威力

來る。

四　人情の具體的象徵如何

かの天岩戸で、神樂の舞を踊つた、天鈿女命といふのは、高天原の神達に仕へた一種の女優である。この天鈿女命は、神前に舞樂を奏したり、神慮を和げたりする、女優であつたばかりでなく、新任の日本の統治者瓊々杵尊の命を受けて、國神猿田彦のところへ斥候に出掛け、その大任を美事に果した。戰爭や外交の秘密に女を使ふ事は、既にこの時代から初まつたもので、人意を和げるには、矢張り女がよろしいらしい。神代に於ての探偵の初めは、高天原に於ける第二回の會議の時、雉名鳴女が瑞穗國の密偵に派遣されたのが第一で、その次がこの天鈿女命の蠱惑的斥候である。

天照大神の仰せをかしこみて、豐葦原の瑞穗國を統治するために、諸將を從へ威風堂々と天八衢に差し掛つた瓊々杵尊の軍隊の前方へぬつと現れ出た背の高さ七尺餘りの巨人は、鼻高くして眼は鏡の如く照り輝く、依體の知れない物凄い怪物だつた。天孫は、先驅の兵の此戰慄的注進を聞き給ふと、諸神を召して斥候に行くやうに命じた。けれ共、諸神は唯眼を見合はするのみで、進んで行かうといふ神もない。この時、天鈿女命は天孫の仰せをかしこみ、衢神の前に近づいて、萬事の折衝を巧みに仕終せた。さすがの巨人猿田彦も、一も二もなく參入つて仕舞つたらしい。そして、初めはどう云ふたくらみが、あ

緣は不思議
私有財産は變態
一夫多妻も一夫一婦も變態
愛は制度に超越す
母主的制度より父主的制度

つたのか知らないが、直ちに天孫の道案内となつて了ふ。が、緣は不思議なもので、天孫の國土經營の基礎が日向に成つてから、猿田彦は召出されて、天孫からこの天鈿女命を忠誠な伺候の褒美として賜つた。そして、伊勢に至り、子孫長く榮えたといふ。後に猿女君と云つたのはこの天鈿女命のことである。

この物語も、別に變態人情と云ふ程のものではない。

五　高千穗時代の過渡期的人情

我が大和民族は、その移住の頭初に於て、奴隷なる私有財産を率いてゐたさうだ。それから、人智が進歩し社會が發達するに從つて、家畜をたくわへるやうになり、こんどは土地の私有に移り、やうやく「文明」といふものが出來上ると、資本といふ新奇な財物が生じて來た。

かの一夫多妻とか、一夫一婦とかの制度は、この私有財産制の生んだもので、人間の眞の人情の上からは、變態である。何となれば、人間の眞人情である愛の生活に、何々でなければならないと云ふ制度的强要がある筈がないからである。

母主的制度の許にあつては、女子も男子と共に經濟的平等の地位にあつた。卽ち、女子も男子と同樣に屋外の勞働に服し、その「力」に於てもさう劣るやうな事はなかつたのだ。ところが、社會を組織する要素

父主的制度も變態
私有財産制度は人情の敵

が益々複雜になり、それにつれて私有財産制度が發達して來ると、男子と女子との間に、職責の分たんが生じて來る。男子は田野に出て勞働に從事し、女子は家にあつて子供を育てたり屋內の雜務につく。これは既に女子が、男子に征伏された事である。何となれば、男子は益々肉體力が強くなり、又經濟上の優者になるのに、女子は肉體的に經濟的に益々弱者になつて行くからだ。こゝに、男子の都合のいゝ父主的制度が生れるのは蓋し當然である。そして、この制度は、つひには女子を物品に迄墮落させて仕舞つた。だから、本當の人情の上から觀れば、この父主的制度なるものも變態であると云はなければならない。

最初は男子も女子も平等であつたから、男子は戀する女子の許へ通つた　だが、　男子は經濟上の强者となると共に、女子を自分の家につれて來て、それを自分の欲するまゝに制御し服從させた。これは、私有財産制度の發達に伴ふ人情の變態であつて、女子は經濟的弱者となると共に、精神的弱者にまでなつて了つた。

學者の說
過渡期と人情の變化
美人は富や力に優る
瓊々杵尊の戀
美女木花咲耶姫

それは扨て、かの瓊々杵尊の高千穗時代は、母主的家族制度より父主的家族制度へ至る過渡的時代だと云はれる。それだけに人情の內容もいよいよふく雜となつて、種々樣々の價値のてん倒を演じ乍ら、波の如く變化し動いて行く。前には、力のある女や、財産があつたり家格のいゝ家の女を求めたのが、そんなものは第二の問題として玲瓏嬋姸たる美人を求めるやうになる。これなぞ、人情の內容の變化である。

瓊々杵尊は、ある日僅の御供を具して山野に狩をした時、路を迷はれて波音高き斷崖絕壁に出で、そこで一軒の八尋殿を見つけ、その家內で機を織つてゐる玲瓏玉の如き美女木花咲耶姫を戀された。そして、早速その父神の大山祇に姫を所望した。大山祇は、尊の仰せを速座に御受けはしたが、咲耶姫には、姉の

姉妹を獻る親心
醜婦拒絕の原理
盤長姫の自殺
自殺は人間の特權

盤長姫といふのがあるから『同胞一緒に召し給へ』と懇願した。尊もその親心は尤であると同胞を共に召し給ふ。

所が、木花咲耶姫の秀麗なのに引換へて、姉姫の盤長姫は、甚だしく醜婦だつたので、尊はこれは飛んでもない事だと直ちに姉姫を突返して了つた。幾ら神世でも、矢張り醜婦を嫌ふのは人情だ。昔から醜婦の深情といふ言葉がある。それは科學的に解釋すれば、顏や姿では男の愛を得られないから、他の秘術で男を引留めやうと努力する事を云ふのだ。だが、二夕目と見られない醜婦の深情なんて、特殊な變態人情家でない限り眞平御免である、

笠沙の宮を下げられた盤長姫は、種々と懊惱煩悶の結果、米良の山中に入つて、幽谷に身を投じて了はれた。この盤長姫の苦惱は、可成りに深刻なものである。自殺は人間の特權であるが、それを決行するのはよくよくの事でなければならない。人間はいつ死ぬか分らない。又自分の意思一つでいつでも死ねる――それだけに生命は尊いのだ。

貞操の疑ひ
木花咲耶姫の悲寃

そののち瓊々杵尊は、益々木花咲耶姫を熱愛されたで、姫は產屋を建ててもらはうと思つて（此頃は分娩は不淨の事となつてゐたので、必ず母屋の外に產屋を建てた）尊に話すと、尊は「我れ如何に天神なりとも、れて、姫の貞操を疑つた。

姫はあらぬ疑ひに、こんな疑惑や侮辱を受ける位なら一そ死んで了つた方がいゝ、とまで口惜しがり悲んだが、早速戶口なき八尋殿を作らしめ、自ら其內に入り『妾、世にも忌はしき疑を受け、生ての恥、死

變態分娩

過渡期的悲劇

しての恨み死ぬに死なれず生るに生られず、此上は斯くして疑を解かばや、我子若し國神の子なれば共に燒け死なん。正しく天神の御子なれば無事に生れ給はん」と悲痛なる一聲を殘して產屋に火を放ち給ふ。けれ共、姫の決心は美事に立證されて、炎々たる焰の中で、無事に三人の御子を產んだ。この變態分娩の出來事は、頭のいゝ學者の云ふ通り正に母主的家族制度（この場合には經濟觀念は共產的で戀愛の機會は自然的共有的だから母子の關係は明らかだが父子の關係が不明瞭だ）から父主的家族制度（これは個人主義的經濟觀念と個人主義的配偶婚の上に建てられたもので、父子の關係は當然明瞭だ）へ移る過渡期的悲劇である。

六　女護國の新らしい女

火遠理命と豐玉姫

女護國

豐玉姫は新らしい女か

木花咲耶姫の產まれた火遠理命は、母の遺傳を受けて非常な美男子だつた。火遠理命は、鹽椎神の教示によつて海神國へ小舟に乘つて渡られ、その國隨一の美人豐玉姫と戀愛に陷ち、つひに結婚した。この海神國と云ふのは、所謂邪馬台國のことで、かの女護の國といふのもこの國の事である。この豐玉姫は人情にも徹してゐれば、婦人權利も自覺してゐた。火遠理命が兄神の火闌降命との戰爭に勝ち自分を迎ひに寄越すと臨月なるにも拘らず、大喜びで命の本國へやつて來た。だが、命に堅く禁じて置いた產屋を覗かれたのを知ると、自分の侮辱されたのを非常に立腹し、夫と子供とを捨ててさつさと本國へ歸つて了つた。恐らく海人氣質だらうが、女護國の美人はなかなかしつかりしてゐる。命が堅い約束を破つて姫の產屋をのぞいたのも一種の人情にはちがひないが、少し見苦しい。豐玉姫が、夫と子供を捨てて本國へ歸つたのは、變態人情のやうではあるが、自分の權利

女護の島

や人格を尊重するといふ上から、正しいやり方である。つまり命に愛を失つたのだ。
豐玉姫に捨てられた御子鸕鷀草葺不合尊は、姫の姉なる玉依姫に育てられた。

戀に階級はない

重な變態人情事件

庶母と相愛

兄妹の戀愛

心中の起源

蛇を戀し變態自殺をす

第二章　上古時代

一　變態的史實

この上古時代は、自由戀愛自由結婚時代であつて、別にそれが爲めのやかましい道德も階級的へだてもなかつた。誰とでも自由に戀愛合戰をし、自由に配偶を選んで結婚をした。

この時代の變態人情事件の重なるものを次に擧げて見よう。

神武天皇の皇子手研耳命は、庶母五十鈴姫と相愛し、又、開化天皇も孝元天皇の妃にして其庶母に當らせられる伊香色謎命を皇后となし給ふたといふ。

允恭天皇の御子木梨輕太子とその實妹輕太郎女とは、深い戀愛に陷ちたが、それが知れて輕太郎女が伊豫に流されるに及んでは、兄の太子は皇位まで捨てて伊豫へたづねて行き、迫害の多いつまらない現世を敢果んで死によつて永遠の生を得るために、遂に二人は相抱いて自殺して了つた。上古と云へど、可成り變態的な心中である。

孝靈天皇の皇女、倭迹々日百襲姫は、年頃になつて一人の戀人を得られたが、その戀人は夜のうちに來て夜去るので、何者であるか姿が分らなかつた。で、姫はその戀人を掻き口說いて、是非姿を見せて呉れと云つた。と、戀人は困じはてたやうに『さらば我明朝汝の櫛箱の中に在りなん』と云つた。姫は明朝になつていぶかりながら櫛箱を明けて見ると、中には一疋の麗はしい蛇がとぐろをまいてゐた。で、姫はあ

處女自殺の流行

變態性慾

畜生を犯す罪

女護島の滅亡

『魏志』に曰く

まりの事に吃驚して聲を上げた。と、その蛇は突然人の形に化して、姫を睨みつけながら『われの汝に本體を見せたるは、汝の請切なりしが爲なり、さるを汝大聲に叫びてわれを辱かしむるは何事ぞ、我も又汝を驚かしてこの恨みを報ひん』と叫ぶより早くいづれへか怪しい姿を消して了つた。姫はこの事件を深く悔い且つ恥ぢて、箸を突き立てて自殺して仕舞はれた。　この物語は、　性慾的潜在意識、戀愛の機會、戀愛の相手如何等の方面から精神分析的に觀て行くと、種々な面白い暗示が裏に潜んでゐると思ふ。

又、この時代には、一人の處女が同時に二人又は數人の男子に烈しい戀をされ、その血色の競爭を見るに見兼ねてつひに投身するといふやうな、妻爭悲劇が流行した。自由戀愛時代らしい悲劇であるが、男女共に戀の態度は眞面目である。處女塚由來、櫻兒の縊死、鬘兒の投身、眞間の手古奈の投身の傳說なぞが有名であるが、美しい處女がその美貌の故に死すといふ悲劇は、可成り戯曲的でなければならない。

太古、上古には未だ道德的觀念も發達せず、無智蒙昧な者共が多かつたから、殆ど本能のおもむくがまゝに、殆ど無意識に畜類や鳥類を姦した。それは到る所で盛んに行はれたらしく、『古事記』や『日本紀略』その他に『馬婚、牛婚、雞婚、犬婚』のことが記されてある。だが、この畜生を犯す變態性慾は、太古上古ばかりの事ではないらしく人文の進步した現代の紳士の裡にも、思ひ出したやうに行ふ者が稀にはゐるのである。

かの豐玉姫の在所なる耶馬台國(女護島)は垂仁天皇の頃に、隣國の熊襲の壓迫によつてつひに滅亡した。『魏志』にこの耶馬台國の事が記してある――『伊都國は郡使の往來に常に駐まる所にして人口千餘戶あり。世襲の王ありて女王國に統屬せり。それより東南奴國に到る。人口三萬餘戶あり。更に東行すれば

男王拒絶

女裝にたくみな我民族

女に化けた無頼漢

變態人情家

不彌國に至り、南は投馬國に至り、耶馬台に至る。女王の都する所にて水行十日、陸行一月、人口七萬餘戶あり、其國もと男子を以て王と爲したりしが、七八十年前より國亂れて相攻伐すること、年を經たりしかば乃ち共に一女子を立てて、王と成すに至れり。女王名を卑彌呼といふ。年已に長大にして夫婿なく、男弟ありて國を佐け治む。王たりし以來見ゆるもの少し、婢千人を以て自ら侍せしむ。唯男子一人あり、飮食を給し、辭を傳へて出入す、居處、宮室、樓觀、城柵嚴かに設く、常に人あり兵を持して守衞す』云々。――なかなか勢力の大きな女護島である。この女護島では、女王が死んだ時、こんどは男王を立てて見たがどうしてもうまく行かない。で、仕方がないから、前女王卑彌呼の長女壹與といふ十三の少女を立てて見た所が、立所に國中が順服したといふ。女護國では男王を立てるのは、正に變態に違ひない。

二　女裝の問題

先に素盞嗚尊はたくみに女裝して、異族の長八人を平げ、又、小碓命(日本武皇子)は、美しき采女に粉裝して敵城に入込み、熊襲の首魁川上梟師を刺殺した。かうなるとわが大和民族は、先天的に女裝の巧妙な民族らしい。だから女形といふものが、世界的までに異常に發展したのだらう。又、江戶時代には、女裝の怪賊が神出鬼沒して物持を惱めた。かの「女に化けてつつもたせ」を働いてゐた辨天小僧菊之助なぞは、最も知られた一人である。世には女性的男子、男性的女子なぞと云ふものがある。これは明らかに變態人情家だが、單に女裝や男裝に巧みだなぞといふ事は、變態でも何でもない。

變態長壽

長生の希望

長生は迷惑

本當の生命の使ひ方

長壽の希望は理屈に非ず

三 變態長壽

神功皇后がかの高祖神の御託宣によつて新羅を征服遊ばされた時、軍中に隨從した武內宿禰は、三百八十餘歲迄生きたといふ。隨分な變態長壽だ。然し、別にその道の權威の御高說を俟つまでもなく、この長壽話は『日本書記』か何かの間違ひだ。いくら昔の人が長生が上手でも、四百年近くなんか生きられる筈がない。かけ引きのない所は百二三十だらう。

人間は皆、一日でも多く長生したい本能的希望を持つてゐる。かの『不老長生物語』なぞといふものは、この希望が生んだ御伽噺だ。だが若し人間が、自分の思ふが儘に長生出來るやうになつたら、却つてうるさい故障が增えて長壽が迷惑になり、こんどは自殺か何かを急ぐだらう。試に『不老長生』の傳說を讀んで見ても、その中の老人達は、寧ろ長生といふ變態的なものを餘り有難しと思はず恥しがつてゐる。

人間はそんなにやけに生きなくつたつていゝではないか。本當の生活は、一瞬の中によく永遠を生かすことだ。無闇に長く生きたがる人は、本當の生命の使ひ方を知らないのだ。人間は、本當に正しい充實した生活をして定命の中に死ねばいゝ。こんな力强いこんな美しい事はないではないか。それ以上を望むのは、變態である。枯細つて無爲の命はいくら長くつたつて屁にもならない。却つて婆婆ふさげだ。けれ共、理屈は兎に角出來るだけ長生したいのは矢張り人情だらう。

愛情の舞踊場

如何なる戀も自由

四 自由戀愛の道場

上古の『歌垣』と云ふのは、今の盆踊りの如きもので、春とか秋とかいふ氣候のうるはしいそして愛慾のひとみが輝く頃に於て行はれたもので、若き青春期の男女が寄り集つて、お互ひに歌を唄ひ舞ひ戯れて遊ぶ快樂的會合のことである。この自由で愉樂的な、愛情の舞踊場へは、時折は貴人も立交ぢられた。

この歌垣に加つたものは、先づ自分の愛する女の名を問ひ家を問ふ。そして女がそれに答へ話がうまく纏れば、自分の身に附けてゐたものを愛人に贈り、結婚の證とした。が、その相手は處女ばかりでなく、何でも自由に妥協する事が出來た。(『萬葉集』にこの燿歌會の自由奔放さを歌つた歌のあるのは有名だ)。

この『歌垣』は、都の人は街の中で行ひ、地方では山や野で行つた。かの常陸の筑波山、攝津の歌垣山、肥前の杵島山等の『歌垣』は正に自由戀愛と自由結婚の大道場であつた。

佛教思想
唐風化
變態な私有財産制度の發展と婦人の地位
婦人は暗中で飛躍をするもの
奴隷的道德淫賣婦起る
慈善は僞善

一　唐風人情の潜入

我國に初めて佛教の入つて來たのは、繼體天皇の御代(紀元千百六十七年御即位)であるが、それが正式に渡來して朝廷に信じられるやうになつたのは、欽明天皇の十三年(紀元千二百十三年)であつた。この佛教思想が入つて來、益々隆盛におもむくと共に、我國の思想や人情や文物は種々な意味で旺んな唐風化を行はれ、政治的にも、經濟的にも、社會的にも、又文學的美術的にも、非常な進歩發達を遂げた。けれ共また、それと共に、一面かの變態的な私有財産制度が愈々發展し、結婚は功利的となり、父主的家族制度は確立された。そして又かゝる事情は上古の終りあたりからだんだん蔭へ蔭へ暗黑へ暗黑へと廻りつゝあつた婦人の地位を、益々裏面的なものとして了つた。

太古から上古へ掛けての婦人は、政治的にも經濟的にも、男子と同等の地位にあつて、相互ひにその權力や地位を爭つてゐた。ところが、この奈良朝時代に至ると、前述のやうな事情のもとに力の爭ひに敗北して、婦人は歴史的事實の第一線から消え、色とか情とかといふものを唯一の力量武器として裏面的に生きるやうになつて了つた。この邊りから、婦人の奴隷的道德が生み出され、又、淫賣史の一頁が展かれるのである。

扨てかの唐風流行だが、佛徒が我國民の神ながらの光明的、樂天的思想へ、あの佛教の悲歎的思想をつぎ込んだ事については、例の如く學者の說が區々だが、僕は人間の生活の一裏面を知らせた事で、決して惡くはないと思つてゐる。だが、佛教徒の所謂慈善といふ奴は、この私有財産制度の世の中では、餘り人を馬鹿にしてゐる。それは寧ろ僞善と云つたらいゝのだ。

東大寺の人柱
悲田施藥
佛教の影響
あやふやな理解
僧尼の變態的方面

二　佛の無慈悲

佛教に一番熱心に凝られたのは、聖武天皇と光明皇后とだつた。聖武天皇は、紀元千四百十一年に莊嚴美麗な大伽藍東大寺を建立し、熟銅七十三萬九千五百六十斤といふ大佛を安置し、又、諸國に國分寺を建てられた。

悲田、施藥の二院を置かれ、庶民をして佛の御利益に浴せしめられたが、さんざん疲れ切つた上の施藥救療では、有難味が身にしみなかつた。因果應報の理屈に合はない。

佛教は、わが現實的民族に、現世穢惡とか迷輭悟入とか、因果應報とか、未來成佛とかいふ釋尊の無限靈の教理を敎へ込んで、國民思想の上に一轉期を齎らすと共に、又種々な社會改革を促進した。けれ共、それは後年の事で、最初のうちは、古い上流社會の間へあやふやな理解の許に流行しただけである。

佛教そのものゝ話は、專門家に讓るとして、僕はその當時の僧侶や尼僧の變態的方面を書いて見る。

奈良に東大寺が建立され、全國に國分寺が出來ると共に、佛教は益々盛んになつて行つた。從つて、僧

東大寺の人柱

生くら坊主

粂仙人
色慾修業

日本靈異記

凮來貞操家

萬葉集のこと

尼の數も、益々增えて行つた。元明天皇の一周忌には、京畿の諸寺に僧尼二千六百餘人が集つたと云ふから、可成り多くの僧尼があつた事が想像される。

これ等の僧侶尼僧の裡には、行基大僧正のやうな道念堅固な名僧もあつたが、又、淺學僞善な沙門にあるまじき生くら坊主も隨分多かつた。かの光明皇后に取入つて、醜惡のまゝをつくした興福寺の玄昉や、孝謙天皇(女帝重祚して稱德天皇)の嬖幸を受け、驕僭淫魔の限りをつくし、あまつさへ政治にまで容喙した妖僧道鏡なぞはその代表的惡僧である。又、『今昔物語』の久米仙人なぞが出たのはこの頃だ。

何しろ、名利の化物や、戒律ならぬ色慾の修行者が、愚民を惑はすには頗る都合のいゝ僧侶になつたのだから、欲しいまゝに醜弊妖訛を行つた。

又、僧侶尼僧の生活がいかに亂れてゐたかは『日本靈異記』等にくわしい。

三　萬葉の戀愛的迷信歌

この奈良朝時代は、未だ自由戀愛時代であつた。その代表的女性とされてゐるのは、かの壬申の亂の原因をこしらへた凮來貞操の額田女王と、そして大伴阪上朗女とである。

奈良朝時代が、如何に戀愛自由の時代であつたかは、かの『萬葉集』を見ればよく分る。今迄の所謂史記は、上流階級の出來事しか書いてなかつたが、この『萬葉集』四千五百餘首の歌には、凡ゆる階級の人情的印象が歌はれてゐるので、非常に面白くもあるし、意義も深い。無上の寶典と云はれる以所である。

僕は、この『萬葉集』の歌のうち、變態人情味のある歌を少し拾つて見たが、紙數がないので殘念乍ら割

戀の迷信

愛した。殊に戀と迷信の歌なぞは、素朴で可憐で象徴味があつて殊に面白いと思つた。たとへば

眉根掻き嚔ひ紐解け待てりやも　何時かも見んと思へる吾君

（眉根が掻かつたり、くやしみが出たり下紐が解けたりするは戀人に會へる辻占だといふやうな意）

逢はなくに　夕占を問ふと幣に置く　我が衣手は又ぞ續くべき

（思ふ人に會へるかどうか占つて見ようと、神前に衣の袖を幣の代りに置いたが、ちつとも願ひが叶はないから又も續けてやつて見ようというような意）

なぞといふのが、それである。戀愛は、それが自然的である程、人を迷信化する力を持つてゐるのだ。

四　賣笑婦の出發

賣淫婦をつくりしもの

賣笑婦の出發――それは明らかに社會的にも人情的にも變態だ。奈良朝の終り頃から發展した賣淫は驚くべきものがある。

賣淫婦を生んだ最もな原因は、私有財産制度である。この私有財産制度が、經濟的に弱者なる女子を墮落させ賣淫に迄至らしめたのだ。その事は、今迄書いて來た所を見られても合點が行く筈である。

强者の許に美人あり

日本の賣淫の第一段は、弱者が强者を接待するとき、酒と共に美人を（はじめは娘や妻、次には豫め募集して置いた美人）差し出した事である。

采女

第二段は采女の制度である。（大寶令以前にもあつたが）采女といふのは今の藝者の先驅で一種の官妓である。これは唐風を眞似たもので、彼女等は內膳といふ名目の許に、唐人の使臣の接待役に當つた。

職業的賣淫

第三段は、『萬葉集』に於ける遊行女婦、平安朝のうかれ女、傀儡、女郎、白拍子等の出現である。これらは純然たる職業的賣淫婦だ。

江口の遊女と西行

あそび

遊女の身元

當時の遊女は、その大半は身分ある富者の子女で、和歌の如き文藝の道に達してゐたのみならず、その他の諸藝も堪能で、多少の氣品もそなへてゐた。で、そのお客といふのは、遊行女婦の如く海泊に遊行して行人の伽をする者でさへ、貴人官人であつた。又、その

纏頭

纏頭も、金錢は少く、『被物』――身につけてゐた物品――であつた。

あそび
女郎
傀儡
平民的へ貧家の子女

この多藝多能なうかれ女達は、『あそび』又は『あそびめ』と呼ばれ、本業としては、後鳥羽院の時に起つた白拍子、德川時代の藝者の如く、遊藝を主としたのである。

女郎の起原は、平安の末期、平家が西海にぼつ落の時、死に後れた一門の女達の生計的窮迫の結果であるといふ。女郎は、上臈の轉語だ。

傀儡(鎌倉時代には長者が起る)は一種の私娼的遊女で、(公娼私娼の別は足利時代の義晴將軍の時、財政ひつ迫の餘り傾成局を設置したるに始る)うかれ女等が王公貴人を相手にしたるに反して、平民を相手にして生れたものである。從つて、彼らの身許も、今の遊女の如く貧家の子女に違ひない。だから、遊女のけいべつされなかつた平安、鎌倉時代にあつても、この『傀儡』だけは腰をかゞめて世を渡らなければならなかつた。

以下時代に從つて、說くであらう。

時代大觀
人情の實相
源氏物語
地方の民は原始的人情なり
戀愛のもとで
在原業平
功利的戀愛は曲藝

第四章 平安朝時代

一 官能的戀愛時代

平安朝は、政治的には藤原氏專權時代であり、經濟的には泰平であり、文藝的には第一期全盛期であり、人情的風俗的には戀愛至上主義の遊墮放縱期であつた。

從つて此時代の人情の姿は、非常に官能的、色彩的で、華爛で、刹那的であつた。不義の戀、巧利的戀愛、戀愛苦行、遊蕩ざんまい、此變事が當時の上流社會の人々の生活の常識だつた。これらの人情の實相は、紫式部の『源氏物語』を讀めば、實によくこの色慾世界の葛藤の有樣が窺はれる。

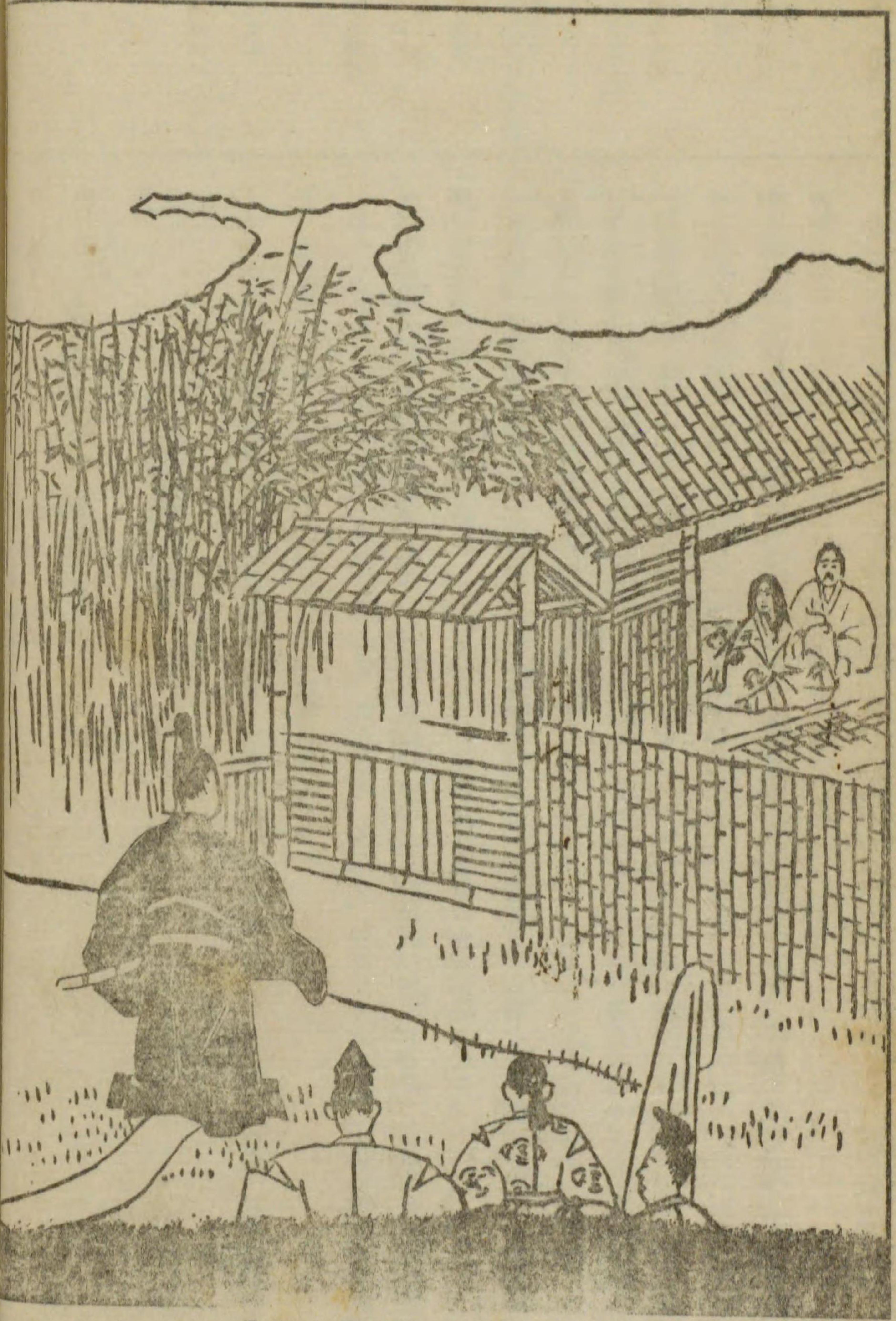
けれ共、これは『土佐日記』『更科日記』その他を讀んでも分る通り、中央の權力階級の話で、地方の平民諸君は、以前として上古風な原始的人情の中にゐたのである。

で、彼等上流社會の人達の戀愛生活のもとでは何であつたかと云ふと、美しい姿と、「和歌」と、高い地位と富とであつた。

その三拍子を完備して、超時代的な果報者に成り澄ました人物に、平城天皇の御孫の在原業平がある。彼の自叙傳と稱えられる『伊勢物語』に依ると、無慮三千三百三十三人ある。然しこれは、少し多過ぎるやうだ。

然して、功利的な戀愛をやり損ねて毒をあふつて自殺した女性に、藤原藥子がある。功利的戀愛なぞ

艶道通鑑第一圖



貴人が美人の許に通ふ有樣

變態素性の小野小町
大化新制を境として變る女性の地位
變態的奇習
悲慘な變化
變態の變態

は、純眞で自由である事を原則とする戀愛に取つては正に變態であるが、私有財産制の世の中では、この色と慾との二道の曲藝は蓋し當り前の有樣であらう。藥子の失敗は、曲藝師の失敗といつたやうなところだ。

この時代に、小野小町といふ絶世の美人が現れ、大いに現代に迄も騷がれてゐるが、この麗人の素性は餘程變態で、異說まち〳〵でどれが本當か分らない。

二　家庭的婦人、文學的才媛

大化の新制を境として、女性の地位ががらりと變つて來た。新制以前は、兎に角政治的にも相當な力を有し、ある程度迄の勇敢な戰鬪力もあり、自個の生活も持つてゐたのであるが、その新制の後は、大寶令の發布、それから永い間の佛教的儒教的な唐風模倣によつて支那文明が潜入し、女性の地位をすつかり消極的なものとして仕舞つた。と、云ふ事は、自由な生命を、貞操とかいふ檻の中へとぢ込められて了つた事である。

殊に良家の子女は、唐風文明(佛教、儒教)の變態的奇習を眞似て、家檻にとぢ籠るのみならず、その顏さへ男に見せまいとするやうになつた。(室内に御簾を垂れたり、凡帳をしつらへたり、檜扇を持つたり隨分うるさいはずかしがりやうだ。つまり、顏の眞中へ貞操と云ふ文字をぶら下げて、變態的奇風の中で社會的に假死して了つたのだ。大化の新制以前と較べると、何といふ悲慘な變化であらう。

けれ共、かういふ風に婦人の地位が消極的變態的になつて來たが、それを利用した藤原氏の閥門政略等

多情多恨の閨秀作家

のために、ある一面では、女權が旺盛になり、數多の才媛が色を競ひ才をみがいて現はれた。彼女らは得々として現れたかも知れないが、生活的には實は男のおもちやとなる可く技巧を凝らして現れたに過ぎない。それは紫式部の『源氏物語』や清少納言の『枕草紙』なぞを、前述の消極的な女性の競色的藝術として見、その潜在意識を深察して見れば、直ちに合點の行く事である。若し、さうでなく本當に女性が自覺してゐたのなら、平安朝の野望的女性としては、政治的にも、經濟的にも、何とかして眞正面から立上つてもいゝ筈である。それが、ひたすらに文藝へ走つたと云ふ事は、此頃の女性の希望的仕事としては變である。要するに彼女らは、生活的に壓へられた所を、藝術的に表現して行つたのではあるまいか。それは、彼女らが特にその性的生活を描いた事でもよく分ると思ふ。

それは兎に角、この時代は女流文學全盛で、多情多恨の閨秀作家達が、雨後の筍の如く現れた。紫式部、清少納言、和泉式部、小式部、赤染衞門、伊勢大輔、出羽辨、高内侍、少辨、馬内侍、新宰相その他、たいしさいしさいであつた。

三　棄老の陋風

殉死の事

わが國には、はやくより殉死なる變態的奇習が行はれてゐたが、それは眞人情にそぐはないものだといふので、垂仁天皇の二十八年に禁じられた。然し、その奇習は、斷續的に德川の末期までも行はれた。

姨捨山

それと、可成り因緣の深いものに、親かくしや棄老なる變態人情的な奇風がある。かの姥捨山傳說などがそれで、これは、一種の原始的迷信で、ある死人病人老人に對する觸穢の思想から起つたものだと云はれる。然し、この陋風が果して我國にあつたかどうか、印度の棄老國の話の輸入ではあるまいかといふやうな事が、學者の間に問題となつてゐる。わが傳說研究の權威藤澤衞彥氏は、信濃國の姥捨山の傳說や、佐渡國、紀伊國等の親隱しの床の例をあげ、わが國にも存在した事があつたかも知れない、と云つてをられる。

信濃國姥捨山

養老は當然な人情

これに、相對するものに、養老物語といふのがあるが、養老は人間のあたり前な人情だ。

人柱傳說と人買船

その他この時代邊りから、人柱傳說とか、人買船物語なぞといふのが、そろそろ現れはじめてゐるが、

これは藤澤氏の專門に屬する。

閨門政策の失敗
悲觀的時代
武家氣質の草成
悲慘なる女性
運命觀的な戀愛の姿
悲戀死戀

第五章 源平時代

一 貞操大觀

この源平時代は、藤原氏の閨門政策の失敗から出發する、武力主義の權力爭鬪時代だ從つて。この時代は、平安朝の華やかで享樂的なのに引替えて、凡ての人情が頗る殺風景で、しかも悲劇的悲觀的である。その主な原因は、佛教の悲觀的運命觀の影響と、血腥い世相に對する人間の本能的悲哀感とであると思ふ。前時代は、天下泰平の長袖的遊惰時代であつたが、源平時代は、武人氣質の草成時代で、凡ての人情が殺ばつで、權力至上的で、非情緒であつた。

この時代の女性の地位は、いよいよあはれで、被征服者的、忍從的な立場にあつた。その自由意思が認められないのみならず、女性は武功勳功に對する、一個の贈答品の如くなつて了つた。從つて、本當の自由な戀愛の機會なぞといふものは、武家の權力爭鬪の間に、美事に打破られて仕舞つた。

けれども、人間の存在する限り戀愛がこの地上から姿を消して了ふなぞといふ事はない。時代思想によつて、その現れ方が異つて來るだけだ。で、この血腥い、生命(いのち)の落着きのない時代の戀愛の特長は、悲觀的、運命觀的、センチメンタルであつた。

そのことは、かの「祇園精舍の鐘の聲、諸行無情の響あり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理を現す。驕れる者久しからず、唯春の夜の夢の如し……」と書き出した『平家物語』中の悲戀——清盛の寵愛を中

社會的な觀察

女は弱きもの

異常にあはれな女性

仇敵に操を食べられる

その實例二女

あさましき平家の婦人

心とした妓王妓女と佛御前との戀愛三角關係の末路、小督局の淋しい運命、又通盛と小宰相の戀等——を見ても、又、常盤御前（その貞操が所謂史家が美化した程立派なものでないにしても）の運命や、『源平盛衰記』中の袈裟御前の運命を見ても、合點の行く事である。

だが、これは、どちらかといふと思想的な觀方だ。これを社會的な觀方をすれば、女性に未だ堅固な貞操觀念が發達せず、それに益々經濟的な弱者（從つて男性に對する抵抗力が萎縮してゐる）の地位にあつたので、あゝ弱き者は女だ、といふあきらめに行き、自ら悲戀の中で倒れたといふ事になる。

何しろ、かくの如く、女性に後世（德川時代）の如き（變態的にまで力强き）貞操觀念がないところへ、男性が荒武者と來てゐるから、女性は異常にあはれであつた。仇敵に操を食べられる位の事は、普通に起つた。

かの木曾義仲の妾の鞆繪御前は、鎌倉方に打破られた主人と共に敗走の途中、四宮河原で遠江の住人內田家吉といふ自稱六十人力の大力無双の勇士を組敷いてその首を取つて了つた……それ程の彼女も、鎌倉にとらはれた後は、敵軍の和田義盛に嫁したといはれる。（傳說）

又、かの越後鳥坂の激戰に、大奮鬪をして、信濃の勇士藤原淸親にふと股を射貫かれた女傑板額は、敵軍の淺利義遠の妻君となり、敵の勇子を生む機械とされて了つた。

以て、この時代の女性の無貞操と無力を知るべきである。そのよき例證は、平家ぼつ落の時における、平家方の婦人たちのあはてぶり、あさましさぶりである。つまり、かうした、女性の無力が、時代の潛在思潮と相通じて、かの戀愛の悲觀調を生んだものであらう。

權力は變態也

武家は化物

權力の狂人性

專政病戰爭狂

民衆を苦しめたい病氣

源氏一族の狂暴性

權力階級のごまかし上手

二　源家の遺傳的殘虐性

一體、權力などと云ふものは、いかなるかたちによらず、皆な變態的なもので、そんな惡魔的なものがある爲めに、この美しい人間の世の中の眞人情を、片つ端から引搔き廻し、歪んだもの、腐つたもの、穢れたものにして了つてゐる。

かの武家といふ人切庖丁を橫つ腹に差した戰爭屋階級は、この變態的な權力を、血色の眼玉をして奪ひ合ふ、權力欲しやの化物だ。戰爭、隱謀、惡虐、殺人、彼等の唯一の商賣とするところは、かゝる變態的な非人情的な仕事だ。——この政權、特權、金權等の怪物は、余程執念く人間をまどはす魔力があると見え、二五八六年丙寅の現在に於ても、われわれ無辜な人間たちを限りなく苦しめ惱めてゐる。——だから、武家といふ階級は自然と、惡虐性變態性が發達し、專政病とか專權病とか、殺人病とか、戰爭狂、規律病とかといふ病氣に引かるゝのだ。そして、それが個人の性癖に現はれては、兄弟相食むとか、骨肉互に殺ぐとか、民衆をやたらに切殺したり、暴虐非道な事をしたりしたい病氣になる。その最もなるものに源氏一族だけ擧げるのは、いさゝか氣の毒だが、兎に角この時代の代表的狂暴な人達だから擧げて置く。

それは、今も昔も權力者のやる仕事には、何とか彼とか尤もらしい理屈はついてゐる。然し、それだけに、隨分ごまかしで、危險性の多い事は、本當に人間らしい生方をしてゐる者には、直ぐその泥裏が見え透いて了ふ。かの源家の血統の裡には、何と都合のいゝ辨辯や理屈を並べ立てゝも、可成りの殘酷性のあつた事は否まれない。

義朝の殘虐
變態的血統
源氏の人情家
義經は女の征服者
義經の戀愛

義朝は、待賢門院對美福門院の勢力爭ひに端を發する保元の亂（裏面的には平氏對源氏の權力爭ひだ）の時、實父爲義を初めとして、實弟の賴賢、賴仲、爲宗、爲成、爲仲を殺人鬼の如く切殺し、又美濃の青墓では自分の子の朝長まで（しかも深手を負つてゐたのに）斬殺し、更に朝廷へ御奉公のため、（例へかう云つても人間としては辯解は立たない事がある。）未だ頑是なき幼弟乙若（十三）龜若（十一）鶴若（九つ）天王（七つ）を殺した。

又、賴朝は、何の良心も持たず、平然として範賴、義經の二弟を殺した。（靜御前の生んだ義經の子も由井ヶ濱で殺させてゐる。）又、賴朝の後繼者賴家の子公曉は、叔父の實朝を殺した。

かう、眺めて來ると、僕の遺傳說はうそではない。しかし、といつても、全部がさうではなく、義家、義光兄弟、賴義、義家父子の如き人情家もゐたのである。

三　女難か時代難か

源義經は、脊が低く反齒で別に好男子でも何でもなかつたが、（但し齒は大分白し）大變女にもてゝゐる。何しろ、年が若くつて、京都の實權を握つてゐたのだから、女の方から集つて來たものらしい。僕に云はせると彼は、女に先天的に惚れられる素質を持つてゐたものではなく、その權威で女を征服したものである。豚や熊見たいな大臣の妻君が、とても素晴らしい美人だつたりなにかするのは、今も昔も變らない、變態人情だ。

それは扨て、義經が撫切りにした美人は、（正妻　越氏は、正史の上でもその性格がはつきりしてゐな

忠信の女難
女難か時代難か
女性は眞人情家
女は虚榮の化物か
忠信女難の次第

い。單なる常識的な女だつたのだらう。）三洲矢作の金高淨瑠璃姬、鬼一法眼の娘、靜御前、平時忠の娘その他であつた。兎に角、頗る艷福の豊な人であつたにちがひない。

だが、その艷福家義經のけらいの佐藤四郞兵衞忠信は、大變な女難に打突かつた男である。然し、この忠信の女難は、僕に云はせると、女難といふよりも時代難といつた方が當つてゐるやうに思ふ。ひたすらに身の安全と、限りなき榮華を望む何ら眞人情のなき女……そんな女に、二十八歲の忠信は引かゝつて了つたのだ。成程、表面だけ見れば女難であるけれ共、女性の本質的な眞人情をけい蔑したくない僕は、その女を增惡する以上に、さうした女を生んだ時代相を憎みたい。忠信が、戀する女に裏切られた時代は、女が個人主義と虚榮の化物になり下りつゝあつた時代なのだ。

で、忠信女難の次第はかうである。忠信は主君義經を無事に落さんがため、只一人吉野に踏止まり、横川覺範を討取つて、危兎の如く山を拔出で京に入込んだ。そして其年の暮、四條に住んでゐる昔なじみの女かやを訪ねた。かやと其父は、忠信を親切にもてなした。ところが、彼が都にある事が、六波羅の耳に入り、詮議が嚴しくなつた。この頃から女の淺薄な心はがらりと替り、我身の安全とその榮達のために、情人を鎌倉方に售らうと鬼心を決めた。そして今鎌倉方の羽振りのいゝ梶原三郞景久に媚を呈し、祕密の會合を誘約した。梶原は女と會つて、その話を聞いてゐるうちに、餘り淺間しい女心にあいそがつき、びつくりして歸つて了つた。で、女は、こんどは六波羅へ出掛け、江間小四郞義時に訴へて出た。義時は、それは大事件と、二百の手勢を率いて、忠信の隱家を襲つた。忠信は無理酒に醉痴れてゐたが、それと知ると屋根傳ひに隱家を逃出し、主君の御座所であつた六條堀川の淋しく荒はてた御所へ逃入り、判官が殘して

行つた魔除けの鎧を着け(小櫻縅に四方白の兜)丸木の强弓をおつ取つて、山鳥矢のつきるまで敵を射殺した。といつても、矢數はたつて十六本だ。で、こん度は太刀切拔いて、獅子奮ぢんの勢で切つて廻つた。けれど、敵は大勢、こちらはたつた一人だ、いくら死物狂ひになつてなやめても、既に負け戰に極つてゐる。もう、十數ケ所の矢傷だ。最早これまでなりと敵方を饜ねぎ、鎧を解いて、心靜かに念佛をとなへ、腹かき切つて椽の柱に臓腑を叩きつけ、而して太刀の切尖を口に啣へ打伏せに身を投げて死んだ。

武士道時代

奴隷的義の道德の出發

人情の輕蔑

支配階級氣質

第六章 鎌倉時代

一 武士道は變態心理

この時代は、武士道が絕對的權威をもつた時代であつて、忠とか義とかいふ道德が、凡ての人情を蔑視して尊ばれた。前時代は、たとへ武家が勃興し政權を握つたとはいへ、支配階級の者達は、矢張り公達風なやはらか味を喜んだので、この時代ほど頑固に堅苦しくはなかつた。然し、鎌倉時代となると、萬事が武人專權で、賴朝式に北條式に實に殺風景だ。

美しい人情、そんなものはどうでもいゝたゞ、理智だ、功利だ、奴隷道德だ。(主從の義といふ美名に於ける)そしてそれは、武士の生活態度ばかりでなく、その戀愛觀念までもこの人爲的、理智的、功利的な一本道德でひた押しに押して行かれたのだから、どちらかといふと淚もろく出來上つてゐる人情味なぞは、早座に輕蔑されて了つた。

愛慾のために、自己を忘却するなぞは、武士道の精神に大いに恥づ可き事である、男女の關係は、只管に理智的に正しければいゝのだ。(この考へ方が政策的早婚を生んだのだ)、人間の生活が人情なぞに依つて支配されるなぞは、もつての他の事だ、人間はたゞ武士道的德義の犧牲にさへなつてゐればいゝのだ、これが當時の支配階級の思想と氣風であつた。だから、この時代の史實には、眞人情の戀愛のために身をほ

武士道は怪風
犧牲的精神の製造
貞操は變態？
愛慾の解脫境

ろぼすたぞと云ふ事は、一つもといつていゝ程殘つてゐない。案ずるに武士道なぞといふものは、專政々治家のあみ出した變態的な支配階級的意識の怪風だ。

男子は、すべからく權力の化物となるか、犬の如き奴隷となるか……そのどつちかだ。どちらへ行つても、人間の眞生命の上からは變態である。然し乍ら、法律とか道德とかといふものは、被支配階級のこしらへるものではなく、その時代の小數の權力者が勝手に都合のいいやうに拵へ上げるものだ。賴朝が、自分の政策に好都合な武士道的犧牲觀念を植つけたのは、彼として當然のやり方だらう。

ところで、鎌倉時代の女子だが、女子も矢張り、人情によつて行動するよりも、理智によつて動いた。(たとへば賴朝と政子との戀、北條時政の後妻牧の方の野心等)彼の、貞操觀念なぞといふものも、眞人情の美として生み出されたものではなく、男子の理智政策によつて、女子が身心を男子の犧牲にしたところより初つたのだ。手取り早く云へば、男子の權力爭鬪の道具に使はれてゐた女子に、何の本當の自由な貞操(女子自らが造つた)があらうぞやだ。戀愛はなん弱で穢らはしいといはれる。そして、結婚は皆な政策關係だ。そして又、貞操といふ有難さうな名前に於て、男子の絕對的奴隷となる。かうした時代の女子はまつたくあはれであつた。

二　白拍子全盛

そこへ行くと、白拍子は、世間並な貞操を捨て、却つて我が貞操を得てゐるから面白い。愛慾生活の解脫境といふと少し大きいが、彼女らが肉慾生活の中から、一種の貞操的意思を得た事は事實である。男性

白拍子の貞操的意思
白拍子の身構え心構え
第一流　白拍子
第二流　うかれ女
第三流　くぐつ
驛妓、土妓、くぐつの壓倒的全盛

は彼女らを單なる玩具だと思つてゐた。ところが、實は彼女らに貞操的意思や女の意地があつたのだから愉快だ。上流婦人は、前述の如く一種の男性の奴隷で、何らの貞操的意思も持つてゐなかつた。然るに、この賣淫婦の階級にその意思や意氣地が發達しつゝあつたのだから益々面白からざるを得ない。このうかれ女や白拍子によつてつくり出された貞操的意思が、後世の武家どもの女房の貞操觀念をつくつたものである。

平安朝のうかれ女は、歌才を以て時の權門の鼻毛を讀んだ。ところが、このうかれ女に端を發した白拍子は、自ら舞を舞つて武家共の御機嫌を取つた。うかれ女は、どこからどこ迄平安朝式に出來上つてゐるのに、この白拍子は、時の權門の要求に從つて、萬事が武家相手に出來上つてゐる。抑も、白拍子の元祖は、靜御前の母の磯の禪師であるが、そのいで立は『平家物語』に『始めは水干に立烏帽子、白鞘卷きをさいて舞ひければ、男舞ぞと申しける。』といつてゐるやうに、大分勇ましい姿だつた。彼女らが武家に迎へられた所以である。『然るを中頃より烏帽子刀をのけられ』たが、こんどはその度胸や氣前で、亂暴や刀爭が商賣の武家共を、うまく和げて、酒席のあつせんその他をやつた。

で、一度び、この白拍子が現れて、上流階級の間に素晴らしく賣出すと、前期のうかれ女達は、上流に顧客を失つて、第二流に落ちて了つた。つまり、白拍子と傀儡との中間にぶら下つたのだ。

そして、又、武家政治の發展と共に中央集權が、地方の豪族に移り、京師は愈々衰微して了つた。それと共に、地方に根城を張る驛妓、土妓、傀儡等が壓倒的全盛を極めた。元々が、私有財產制とそれの申子の政權の悲痛な副產物として生れた彼女らであるからして、地方の豪族が膨脹すれば、矢張り地方に榮え

遊女學者の說
凡て變態
有名な地方遊女
政治にくちばしを入れ、地行取になつた白拍子
二つの變態人情話

るのは當然である。

遊女學者に言はせると、この白拍子が出現して、うかれ女が第二流に下つた邊りから、後世の遊女の沽券の落ちる端緒が開かれたのだといふ。遊女が生れたのも變態・相當な沽券のあつたのも變態、それが平民的になつて沽券が落ちたのも變態だ。

この地方妓女の有名なのに、江口の熊野(ゆや)、手越の千手(せんじゆ)、化粧坂の少將、野上の里の花子・大磯の虎・黄瀬川の龜鶴等がある。

こゝに可成り變つた白拍子がある。それは後鳥羽院に熱愛せられた京の白拍子龜菊といふ者で、この白拍子は政治に口を入れたのみならず(承久の亂の源はこの白拍子が造つたと云はれる)、後鳥羽院をうまく丸めて攝津國長江、倉橋の兩莊を賜り地行取りに成り澄ましたと云ふ。いかに白拍子全盛とは云へ、いさゝか稀らしい事件だ。

三　變態人情味

この時代の史實で、一寸變態人情味のあるものに、源頼家（十八歳で大將軍になつた不良少年）が、けらいの安達景盛の美人の妾を盗みとつた話。又、北條經時の執權の頃、市河掃部助入道見西といふ男が、鎌倉のある美人に惚れ、その頃の流行によつて、若し離別に際しては信濃、伊勢、甲斐等の總ての所領を與へるといふ起誓文を書いて結婚した、後にもつと美人の女が出來、舊妻にあらぬ濡衣を着せて離別しようとしたが、却つて舊妻のために訴へられ、舊妻の神前參籠のあかし立て、古女房に領地全部

博奕と群盗
關白の御曹子實は泥棒
盗人と武士

を取られて了つたなぞといふ話がある。

この時代(殊に承久の亂後)の京都には、私有財産制の生んだ遊戯博奕が流行し、又、人のものは我ものといふ原理の實行家の群盗が横行した。この博奕や群盗をやつた者のうちには、名利の望みを達しられない公家達も大分立交つてゐた。かの攝政關白になつた九條忠家の息子前右近衞中將忠嗣は、群盗に加つたのが知れて高野山に追上げられたといふ。後の石川五右衞門なぞは叛逆的で豪傑的で目的も大きいが、この時代の群盗は無産階級が食ふに困つて群盗に落込むか、不良少年が遊蕩が慾しくてやり初めた仕事だから、度胸も目的も小さなものだつた。

手の長い人

かの武士といふ新階級が藤氏の失政時代に出來たのは、大寶令の兵制も無力となつたところへ、例の公廨利稲の法といふ百姓いぢめの法のために、百姓の生活が益々困窮し、諸國に浮浪者が激増し、從つて理の當然の如く盗賊が現れ白晝でも何でも横行しはじめたので、その用心棒として（訓練兵。一名健兒(コンデイ)。）生れたものである。勿論、その用心棒のうちには、本物の盗賊よりもつとあぶない人物のゐた事は、今も昔も變りはない。

落書心理

正史より本當な落書

痛快な裏面詩

いづれにしても、この人心腐敗の極(歴史家曰くだ)に達したといはれる京都は、以上の早替り的泥棒氏に可成り弱らせられたらしい。

四　諷刺詩的落書

落書——これは、人間の潜在意識の端的な表現だ。落書の面白さは、その書手の意慾とか希望とか怒りとか悲みとかいふものが、素裸の形に於て叩きつけられてゐる事だ。それだけに却つてうそがなく眞面目だ。口に云へない、あから樣に物に書けない、けれど默つてはすまされない、このうつ勃たる緊張の氣分の中から落書が生れる。落書が痛快で面白い所以である。

かの後嵯峨上皇の時代に、院の御所に落書された文字なぞは、正史より本當で、民衆の潜在意識や痛烈な批判が、力強く出てゐる。落書もこれ程、鋭く時の世相を剞つてあると、一種の『時代裏面詩』のねうちがある。

年始凶事あり　國土災難あり　京中武士あり　政治に僻あり　朝議偏頗あり　諸國饑饉あり　天子二言
あり　院中念佛あり　當世兩院あり　そゞろに御事あり　女院常に御産あり　内裏燒亡あり　河原白骨
あり　安嘉門白拍子あり　持明院牛あり　將軍親王あり　諸門跡宮あり　攝政二心あり　前攝政追從あ
り　左府官運あり　右府果報あり　内府にしあり　花山に出家の後悔あり　四條權威餘りあり　按
察使にかしらあり　大辨に院宣定あり　除目僧事に非據あり　嵯峨に八ケ物あり　祇園神輿あり　五條殿
に天狗あり　園城寺に戒壇あり　山訴訟道理あり　寺法師に方人あり　前座主冥加あり　前座治山に勝事
あり　高橋宮に嘉壽あり　綾小路にそしりあり　大僧正に月蝕あり　正僧正に察會あり　圓滿院亂僧あり

櫻井に酒宴あり　聖護院に穩便あり　東寺に行遍あり　南都に專修あり　大乘院馬あり　學生に宗源俊範
あり　武家過善あり　聖運すでに末にあり　社頭回錄あり

奢る者は久しからず
義滿の風俗壞亂
暗き世相
肉的戀愛

第七章　南北朝時代

一　虐げられし女性達

南北朝時代は、表面は武家政治であつたが、その中心を京都に移した關係上、又段々公卿と親しまざるを得なくなり、自然に公武折衷と云ふやうな形になつて行つた。そしてその事情は、墮落し果てた公卿の生活の影響によつて、武家の生活を益々なん弱且つ淫蕩的にし、おごる者は久しからざる道理により足利幕府崩壞の素因を造つて行つた。就中、義滿、義政又かの大好色家高師直の豪奢、浮華、風俗くわい亂なぞは、手もつけられなかつた。

で、この時代の世相はといふと、風流將軍足利尊氏と、勾當内侍の愛に迷つて天下を取りそこねたといはれる新田義貞と南北相拮抗してゐた頃の世の中は暗々として亂れてゐた。又、落書を引張り出すが、建武中興の頃二條河原にあつたといふ落書の中に、『この頃都にはやるもの』として、夜打、强盜、謀綸旨、召人、早馬、虛騷動、生首、還俗、自由出家、俄大名、迷者、虛軍等を擧げてゐる。以て當時の亂世を知るべきだ。それから尊氏が完全に京都の實權を握つてからは、華美、淫蕩、遊惰安逸な公卿共と下手糞な連歌なぞをやつて風流の眞似事をしたり、京美人にうつゝをぬかして國事を忘れたりして、盛に華美淫蕩な風潮をかもし出してゐた。前時代に榮えた武士道も、この時代に至つて全く頽廢したのである。

ところで、此時代の男女關係は、男性はいよいよ横暴で、女性には其人格どころか自由意思さへ認めら

虐げられし女性
貞操的自覺
妖婦的毒婦的心理現はる
夫に殉死する妻の心理
社會的厭世

れず、物品と同等に取扱はれた。そして、その戀愛は、全々といつていゝ程肉的だつた。(けれ共女性はこの間に、戰國時代に盛んに用ひた閨中飛躍の手心をのみ込んだのである。)

だが、然し、さうした戀愛人情の中から、一つの不思議なものが現れはじめた。それは、上流社會の一部の女性達の貞操的自覺である。その悲劇味をおびたのが、新田義貞の情人匂當内侍の淋しい最後、楠正行が後村上天皇から賜品された辨内侍の悲痛な最後等であり、消極的新道德と結びつくと、楠正成の妻の如き、家庭的良妻賢母型になるのである。

それから又、全々人格を無視された弱き女性の間から、良妻賢母型でない、一種の叛逆的精神を持つた妖婦的、毒婦的心理の生れた事も、可成り興味のある事だ。義政の側室大館氏、烏丸氏、有馬氏は三魔と云はれたといひ、又、菊亭殿のお妻の如きは素晴らしい凄腕だつたといふ。

二　代表的淫虐狂

この時代には、未だ武家の妻に『貞婦二夫に見えず』といふ道德がしつかり出來上つた譯ではないが、それでも前時代のやうに仇敵に易々として操を食べられるやうな事は少なくなつた。敵に操を柔躪される前に、夫に殉死して了つたのである。これは一面佛敎思想の影響であると共に、一面、經濟的には自活の出來ない、そして生きてゐれば厭でも何でも男の私有物にならなければならない彼女らの最後の悲劇的決心であつたのだ。だから、貞操のために死んだのではなく、社會的な壓迫のために厭世したものであると云つた方が當つてゐるかも知れない。

代表的淫虐家

この女性の經濟的無能力と、貞操觀念のたしかでないのをいゝ事として、その情慾の燃えるがまゝ、其自己主義の欲するが儘に、美女を鷲づかみにし、淫虐を極めた好色漢に、足利尊氏の執事高師直がある。師直は、自己の權力と地位とを惡用して、その低劣な變態的慾望(奢侈、　)を、腹一杯に充たした。だから、落書、諷刺上手な京童は、師直の夜遊びに憎惡の鼻を向けて『執事の宮めぐりに手向をうけぬ神もなし』と歌つたといふ。彼の不義荒淫のことは『塵塚物語』『太平記』だけでも、大した數にのぼる。彼の如き自己主義の男こそ、私有財產制と權力の化物の生んだ好個の變態心理者だ。

高等やり手婆と幇間法師

この高師直が、出雲の守護鹽冶判官高貞の妻に、時の高等やり手婆侍從の煽動で惚れ込んだ時は、一種の幇間法師だつた兼行法師に長つたらしい艶書を書かしたり、侍從をおどかして

その戀が叶はないとなると、高貞を追討して迄妻君を奪ひ取らうとした。そしてつひに、高貞の妻に子供を殺して自殺までさせた。正に淫亂狂のやり口である。

三　心中のはじまり

心中は我國の特產

心中學者の說

心中といふ眞人情の燃華は、我國の特產だと云はれる。西洋や支那にも全々ない事はないが殆ど稀で、その確かな意識さへ發達してゐないといふ。心中を社會學的に研究した學者の說によると、この現象を政治の進化的階級の上から見れば、極端な自由な社會や又極端な壓制時代には心中がなく、相當な善政の行はれた文化の隆興期に(かの元祿、寶永の如き時)にこれが多く行はれると云ふ。そして其重な原因は戀愛問題と經濟問題と社會道德と家庭の不和と佛敎の末世思想の影響だといふ。

變態心中の種類

心中は原則的には、相愛の二人の男女間の合意的自殺だが、無理心中、一人心中、女同志の心中、男同志の心中、道伴心中、三人心中、兄妹心中、跡追心中、狂言心中、夫婦心中(これは普通の心中の上からは變態)等の變態心中がある。又、親が女中と心中し、子が娼妓と心中し、孫が藝者と心中したなぞといふ家傳的心中もある。

心中のはじまり

若黨と女童の心中

わが國の心中の始りについては、種々異說があるが、たとへ變態的にしろその意志が心中には違ひないのだから、萬葉集に出てゐる茅沼男の後追心中を以てはしりとする。それから、この南北朝に、吉野拾遺に實錄する心中がある。里村主稅の若黨と內侍の女童とが深い戀に落ちたが、身を托するに由なくといふ事情で、山林に入つて來世を契つて相對死をしたといふのだ。

心中の全盛期のことは、江戸時代に於て述べる。

四　美術、春畫、公娼、私娼

華奢放情

美術の發達

畫家全盛

足利時代は、絕えず戰亂の禍があつて、人心が動搖したにも關らず、室町時代、東山時代等の華奢放情な時代があつたので、凡ゆる美術は、はからざる隆盛發達を致した。この期に、素晴らしい發展をとげた藝術は、繪畫、陶器、漆器、金工、連歌、猿樂、田樂、能樂(觀世流)茶、香、挿花等であつた。就中畫家はその地位も高く、頗る幅が利いた。だから、公候、權門、富貴の子弟に非ざる者は、前時代に好んで僧侶になりたる如く畫家の門に入つたといふ。當代に出でたる秀れた畫家に、如拙、周文、雪舟、正信、元信、宗丹、兆殿主、光信等がある。そして、陶器師には祥端五郎太夫、彫刻師には後藤祐乘等が現れた。

春畫の起源
自稱天下一
傾城局
公娼、私娼の區別
人を喰つた權力階級
山賊、海賊

この點、足利時代は、美術の黄金時代である。然し、美術の發達した割合に文藝の發達しなかつたのは、一寸不思議の如くであるが、文藝は生活の糧であるのに、美術はより多く經濟的に餘裕ある者の玩賞品であるからである。それは扨て、かの德川期に於て大いに隆盛に赴いた春畫は、この時代の土佐派の繪畫から出發したものである。

以上の如く美術の黄金時代が來たから、凡ゆる種類の職人(瓦屋、笠屋、餅屋等まで)はこぞつて天下一を自稱したといふ。

これまでの遊女は、官許もなく、一定の稼ぎ場所も持たず、又何らの税も支拂はなかつた。ところが、この時代に至つて、幕府は傾城局なるものをまうけ、(最初の傾城官は竹內重信か?)遊女に官許の巻面を下附し、重税を課した。この邊りから公娼私娼の區別が出來たものである。

この原因は、戰亂の疲弊及び、三代將軍義滿と、八代將軍義政との豪奢のための經濟的逼迫である。この權力階級共は、民衆に苛れん酷税を課したるのみならず、豪商よりめちやくちやに金を借り、あまつさへ德政といふ美名のもとに、娼婦たちに重税を課したのである。そして、その金で大きな面をして、彼女らを弄んだのだから、人を喰つてゐる。彼らの人情は、いつの世でも變態に出來上つてゐる。

五　海賊の事

『太平記』の中にかういふ事が書いてある。『四十餘年が間本朝大に亂れて、外國暫くも靜かならず。此動亂に事を寄せて、山路には山賊ありて(註――これは武士の內職や浮浪の徒の仕業だ)旅客緑林の陰を過得

回漕業者實は海賊
海賊は村上義弘
海上大將軍
海上のバハン
密輸入

ず。海上には海賊多くして舟人白浪の難を去兼ねたり。欲心强盛の溢者ども類を以て集りしかば、浦々島々多く盜賊に押れて、驛路に驛屋の長もなく、關屋に關守の人を易たり。結句此賊徒數千艘の舟を揃て元朝高麗の律々泊々に押寄て、明州福州の財寶を奪取り、官舍寺院を燒拂たる間、元朝三韓の吏民之を防兼て、浦近き國々數十ケ國皆住人もなく荒れけり。』

裏面史の上の和寇のはじめである。『太平記』の記述に依つても窺はれる通り、可成り大がゝりな、海賊達である。この海賊たちは、世の中がおだやかな時は、回漕業を營んでゐるが、一てう世相が亂れる時は、直ちに海賊と早替りをし海の領主地頭と成るのである。

南北朝の初め頃、伊豫國に村上義弘といふ海賊があつた。彼は、諸國の群小海賊共を統一して、其首領であつた。所が、村上が沒すると、その同族の山城守師淸(北畠顯家の子)といふ武家が信濃よりやつて來、三百餘騎を率いて紀伊の雜賀より船を出し、先づ讚州鹽飽島の海賊鹽飽三郞光盛を降參させ、備中の神島邊りの小海賊を手下にして、たうとう伊豫の大島に至つて、村上の繩張りを全部我ものとして了つた。そして彼は、西海の要港浦々を征服して、自ら海上大將軍と稱し、往來の船を切取り、(其主なるものは朝鮮の入貢と其の貿易)豪奢な生活をした。彼らの後繼者は、村上山城守雅房や(師淸の孫)伊豫の河野氏で、明の王直といふ者(多分密輸入商ならん)の手びきで、盛に明國を侵掠し海上のバハン(恐ろしき惡者の意)として、明國や朝鮮の船の恐怖の的となつた。そして、あはよくば、泰西までも侵さうと云ふ勢だつた。が、然し、王直が明に降服し、其の手下が殺されて了ふと、我國の海賊も大頓坐を來して、又、こそこそ密輸入でもやつてゐるよりほか仕方がなかつた。かくて、大海賊は、滅亡して了つたのである。

この事實なぞは、一種の社會的な變態人情的事實だと思ふ。泥棒心理といふものは、時の社會事情や經濟事情とくつつけ合はして考へて見ると却々面白い。少し勇敢に暴虐や强盜をやれば、兎に角大將軍といふ名前のつく者になれる事が、皮肉で愉快だ。

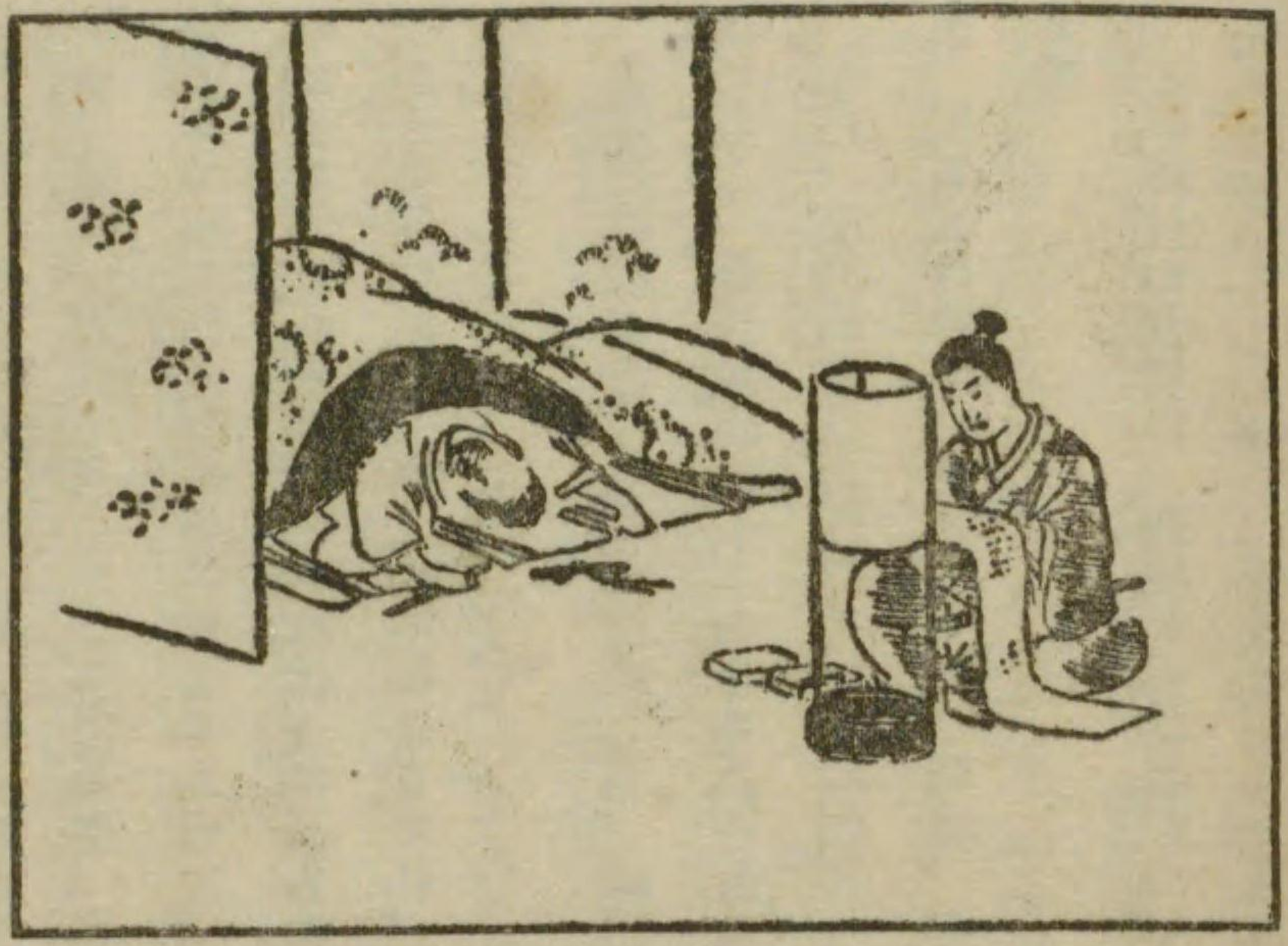
六　自殺の事

自殺の心理如何

自殺は人間の特權だ。いつでも自殺が出來る事に於て、人間は生命の尊さを知つてゐるのだ。けれ共、人間は限りなく生きたいと共に妙に生きてゐる事が儚くなり急に死にたくなる心理も持つてゐる。もののあはれ……生命は夢……万有迷轉永遠に悟りのない現實……不可解な人生……かうした觀念が、生の意思を弱くしてやゝともすると自殺に導く。人間は、心の迷ひを悟り、眞人情と變態人情と、常識と狂氣、皆なかうした相互に矛盾したものの中に、生きてゐるのだ。だから、何かの機會で死の誘惑や刺戟や暗示が起れば、急に氣狂にもなるし、首も縊る。生きるといふ事は實に有難い事で、しかも異常な冒險を冒す事である。生命の裏には必ず死があり、死なうと思へばいつでも死ねるのだ。人間の生存心理の底は完く怖ろしい。神秘にまで力强く、且つもろい。

自殺と世相

自殺は、(昔は生害、自害と稱した)既に神世からあつた。而して、人間の社會的經濟的人情的生活が複雜になつて來るに從つて、益々增えて行く。然し、自殺は孰れにしても不幸な人々、虐げられし人々のやる事である。生きる事に絶望した人が、此最後の特權の中に自ら滅するのだ。貧民、賣女、病者、失敗者等に自殺が多い以所だ。それが證據には、亂世、壓政慘酷の世、世紀末、經濟的窮迫の世等に、自殺が多く



自害の畫

現れてゐる。

しかも其原因は、社會の內容の變遷と共に變つて行く。

たとへば、前時代は人情のために自殺する者が多かつたが、この時代になると經濟的窮迫のために自殺する者が多くなつた。

變態的自殺

これらの例外として、何らの不平も不幸もないのに、限りない歡喜の裡に自殺する者がある。これは、自殺上の變態といつてい丶。

現在が餘り幸福だから、其幸福の逃げない様に自殺して果てるなぞといふのがその一例だが、その心理を考へると矢張り悲慘だ。自殺については、いろいろ變種の例があるが、細かく擧げてゐられないのが遺憾である。

虎狼の爭ひ
眞人情影を沒す
戰國的變態人格者
戰國的變態人情行爲
亂世
粗暴な人情

第八章　戰國時代

一　亂世の不人情

言ふ迄もなく、この時代は兵亂の時代だ。群雄割據時代なぞといふと、何となく重々しさうで聞前はいゝが、實は、詭謀にたくみな狡猾な者、惡運强き者、野蠻な殺人術に達した者等が、虎狼の如く天下を爭ふ泥血でぬられた世の中の事を云ふのだ。爭鬪に爭鬪、戰亂に戰亂、かうした血腥き慘風の吹きすさぶ破壞的混亂的な時代を、戰國時代とは云ふのだ。

かゝる時代には、世は暗雲にとざされ、眞人情は影を沒し、種々樣々な變態的人物、變態的事象が現れて來る。

北條早雲にしろ、毛利元就にしろ、武田信玄、上杉謙信にしろ、織田信長にしろ、豐臣秀吉にしろ、秀次にしろ、德川家康にしろ皆なそれぞれに、戰國的變態人格者だ。

また、戰國的變態人情行爲に次の如きものがある。戰術といふ名前に於ける、陰謀、虐策、秘計、謀殺又、戰策又は政略のための人質、强姦、不義密通、結婚、離婚等、又、妖怪變化、暗殺業、首泥棒、女狩り等。

この時代の世相は、戰亂から戰亂がつゞき凡てのものの中心點といふものがなく、生命財産は不斷におびやかされてゐたので、極端に不安で亂れてゐた。從つて、人情はその美しき落つきを失ひ、ややともす

戀愛意識の蹂躪
戀愛價値の下落
政略結婚
女性の絕對的服從
京都の衰微
民衆の困憊疲弊

ると粗暴になり變態的になつた。かう云ふ世相人情の間で、かの眞人情の戀愛なぞが、自由に味はれる余裕がある筈がない。戀愛意識は、戰亂によつて美事に蹂躪され、人間生活の上の第二義的第三義的なものとされて了つた。榮達、身の安全、功利が第一義で、戀愛は、その手段だくらゐにされて了つた。平安朝時代と比べて、何といふ戀愛價値の下落であらう。即ち、政略結婚が露骨に榮えた以所であらう。この戀愛意識を認めない政略結婚にあつては、當然の如く女性が犧牲になつてゐる。といふのは、女性が人格や權利を認められず、絕對的服從を强いられて、男性の榮達の手段となつて了つてゐたからだ。

京都が衰退し始めたのは、足利幕府の末期からであるが、殊に應仁の亂以後は目も當てられない有樣であつた。後奈良天皇の御時には、宮廷を守護する者さへなく、大內荒れるにまかせ、禁城には心なき京童が群をなして遊戲にふけつたといふ。そして、市內は、雜兵や窮民が亂暴狼藉を極め、非常に物騷だつたといふ。かの、紫辰殿の築地は破れ、三條橋の邊りから、內侍所の燈影が見え、左近橋のもとへ茶店が出來たといふのはこの頃のことだ。この頃の公卿の生活なぞと來たら、實にみぢめなものであつた。宮城のある京都さへが戰禍に呪はれてかくの如くであつたからして、他は推して知る可しである。それは、地方なぞで、大名の羽振りの間に間に榮えたところもあるが、それもたつた一時的の事で、又兵亂に襲はれたのである。この時代の、民衆の困憊や疲弊の慘狀は、想像に余りある。少數の英雄(權力階級)の私慾のために、隨分な苦惱と犧牲を拂はされたものだ。

二　殺人術、殘虐性、淫亂性

信長の殘虐性

織田信長は可成り神經質で、しかも偏狹者だつた。相當な人物のくせをして、剛腹といふところがない。それは、彼が部下を慘酷に虐待した事でも分る。先天的には、奇計といふ殺人術に達してゐ、後天的には、人材登用といふ自己の從屬を見つけ出すけい眼があつた。ある程度には、人情味も持つてゐたが、武人專權といふ變態的な政治慾のために、その人情味さへ犧牲にして了つた。信長も、政治的專權を望む征服者的變態心理者だけあつて、隨分慘忍な行爲をやつた。太田錦城が『梧窻漫筆』の中で、その數々を擧げてゐる。曰く『信長の殘忍を見よ。甲斐の惠林寺にては、多く僧俗を燒き殺し、荒木攝津が叛せるを怒つて其人質の二百八十人を誅し、尼ヶ崎に籠りし、荒木が家老に見せんとて、

苦くて身を勳すを上總躍りとなづけたり。義景長政父子三人の髑髏　元旦

の祝儀に出したり。虎狼の人に化したる者なり』と。恐ろしい殘虐者である。又彼は、齋藤道三の政略結

妻君を詐く

婚にうまうまと乘せられたやうな顏をして、その娘の濃姬(あつひめ)を妻としたが、齋藤があつては眼の上の瘤だといふので濃姬(あつひめ)の實家思ひの心を利用して彼女を詐き、たうとう齋藤家を滅亡させて了つた。この位の智謀は、信長としては、朝飯前の仕事だつた。尤も、この事件は、まごまごしてゐたら却つて自分の方が、油

戰國は不人情

賣りから詐欺橫領惡策で成功した齋藤のために滅ぼされて了つたかも知れないが。戰國とは實に不人情極りない亂世だ。又信長は、例の政略結婚として、自分の妹の日本一の美人お市の方を、强敵淺井長政におくつて和ぼくしたが、一度び淺井に裏切られると、直ちに滅ぼして了つた。然し、お市の方を中心としての淺井氏に對する態度は、さすがに人情があつた。

秀吉の盗賊性

豐臣秀吉は、百姓の子に生れ、纔か十二三歲にして大盜賊蜂須賀小六の子分となり、草履取りから天下

天下のための理不盡

を取つた程の人物だから、非凡な變態味や不人情や怪魔性や謀策術やを多分に持つてゐる。戰國的豪傑とは、かう云ふ猛烈な怪腕家、沒義道家、淫蕩家の事を云ふのだ。秀吉は、天下のためといふ名目の、極めて蟲のいい我利のために、自分の異父妹の朝日姬(四四)を、佐治日向守から理不盡に奪ひ返して、(日向守はこのために憂欝性になり自殺したといふ噂がある)德川家康(四五)と政略結婚をさせた。又、家康を上

生母の人質

洛させる策戰として、自分の生母大政所(おほまんどころ)を岡崎に人質に送つた。策戰もこゝ迄行くと、徹底してゐる。然し、彼もさすがに心にとがめる所があつたと見え、『日本開闢以來今に至る迄先例なき事を秀吉仕り、歷史にいいいとゞめ置かれんと存ずる也』と言譯をしてゐる。よく考へて見るとこの辯解も、彼の自我主義的潛在意識

自意主義の暴露

の現れだ。自分が歷史に書かれたいために生母を人質にやるのだといふ辯解は、余り人を喰つてゐる。又

耳鼻狩り

秀吉は、變態的殘虐性にも富んでをり、かの朝鮮征伐の折には、晉州城中の敵の耳や鼻をそいで虐殺した。舊記に記載された分だけでも、二萬五千人近くある。だから本當は、六萬人くらゐは彼の慘酷な私刑

洛東耳塚由來

に會つたかも知れない。洛東耳塚由來に『今年慶長三年の秋、朝鮮にて斬取る所の耳鼻

人目を驚かせり、何さま此耳鼻の、

見る者舌をふるはしける、則ち太閤の御下知とて、洛東大佛殿の前に大なる穴を掘らせ、め、後世に殘して其勇名を異邦まで輝し給ふ。是を號(ナヅ)けて耳塚といふ。此後朝鮮人來朝の時、かの耳塚を

英雄色を好み過ぎる事

見て淚を流し』曰々と。以て其慘狀が想像される。又、彼が、頗る附の淫蕩家であつた事は有名だ。太田錦城は『梧窻漫筆』の中で『秀吉の淫肆を見よ。信長の姪小谷の方を奪ふ心あり。信長の女氏鄕の後室をも

上淫を好む心理

奪ふの心あり。(會津より上洛せざるを怒つて、秀行を宇都宮へ封を移せり)信長の姪小谷の方の女淀殿を

御本室五人
面白き事實
秀吉の非道
人心收攬術
天下第一の大泥棒
淀君のうさはらし

妾として夫が腹に秀頼を生みたり。皆小人の上淫を好むの心なり。』と書いてゐる。彼の聚樂城の閫中には『色を爭ふ美妃數々』が、秀吉　　　　　　　　　　　『其うちに秀吉公の御本室なりと時の人の恐れ奉る女君五人おはします。』その第一は北の政所、第二は松の丸殿、第三は三條殿、第四は加賀殿、第五は淀君。このうち秀吉が一番熱愛したのは、艶麗茶々御料人（淀君）だつた。だが、變態人情の上から面白いのはこの淀君は、實は秀吉の御主筋であると共に、秀吉を父母の仇敵と狙ふべき立場にゐるといふ事だ。

又、秀吉は、時の茶禮の大家千利休の娘吟女といふ美人に惚れ込み、それを妾に差出すやうに申付けたが、利休が手ひどく拒絶したので、（史實にはそれに加るに利休には紫野山門の佛像のことで僭越な事があつたといふ）三條河原で誅させて了つた。天正十九年の秀吉譜に曰く『宗易（利休の本名）が首を一條戻橋の下に梟し、彼木像を掲げて其首を踏しめ、柱を以てこれを夾立る。數日視る者市のごとし』と。

しかし、秀吉は、人心を和らげ收攬する事が天才的にうまかつたと共に、女性の心情をとらへるのも甚だ上手だつた。その彼の情的手腕の最な現れは、糟糠の妻高臺夫人に對する敬愛的な態度であつた。秀吉は、石川五右衛門が奴鳴りつけたやうに、『天下第一の大泥棒』になり得た人物程あつて、なかなか味なところがあつた。その快樂主義の派出で大つ腹な生活振り、子分に對する甘さ、秀次に對する寛大さ、駄洒落的政略等は彼一流の面白味である。

三　淀君の祕密

淀君は、秀吉の在世中から、大野修理太夫治長と情的關係があり、かの秀吉が何物にも換へ難く寵愛した秀頼は、實は治長の　であるといふ。この事件は、室町時代に於て、將軍義政の亂行奥樣官子夫人が、日野勝光を愛し、　　　　事件ほどはつきりしてゐないので、種々な異說がある。だが、秀頼は、其容貌性質まで治長生寫しだつたといふから、事によると事實であつたかも知れない。然し、淀君と石田三成との情的關係日々は、どうしてもつぢつまが合はない。虛說である事を保證する。

薄情で淫逸
義政以上の淫亂家
比叡山の田獵
關白惡逆の事

四　畜生關白の變態心理

秀吉の養子（甥）秀次は、凡ゆる意味で變態心理者だ。彼は、左程頭の惡い人物ではないらしいが、何にしても成り上り者なので、傲慢不遜で、人情といふものを知らない。彼は、變態的につむじ曲りで、しかも、極めて薄情で、遊惰淫逸だ。彼は漁色を唯一の生命としたやうな男で、秀吉をさへあきれさせた程の荒淫家だつた。室町時代の淫樂狂者足利義政は、公家の姫君、武家の娘等を手當り次第になぎ倒して、舊記に現はれてゐるだけでも四十余人の寵孌を置いたが、彼も決してそれにおとらなかつた。その上に彼は、殘虐性さへもつてゐたのだ。彼は、一の臺母子を併せて　　　　畜生關白とあだ名されたが、彼のこの畜生と云はれた意味は、非常に深刻だ。彼は、文祿二年の正月には、上皇の御喪中なるにも拘はらす、女人禁制の比叡山に愛妾を伴して登り、大仕掛けな田獵を催し、つむじの曲りつぷりを見せた。この時の一條の辻の立札に「先帝の手向のための狩なればこれや殺生關白といふ」と書いたものがあつたといふ。又、文祿二年八月に秀頼が生れると、憂悶性から殘虐性を併發し、無暗矢鱈に『御手打』をやつた。『聚樂物語』の關白惡逆の事といふ條りの中に次のやうな恐ろしい慘虐の事が書いてある。『いつし

か御機嫌暴くならせ給ひて、御前近き人々も、故なく御勘氣を蒙り、或は御手打に遭ふもあり。さればいつとなく人を切る事を好み給ひて、罪なき者をも斬り給ふ間、御前の人々も、今日迄は人を弔ひ、今日より後は、如何なる憂目にか遭はんと、皆人毎に心を碎かぬはなかりけり。』『ある時御膳あがりけるに、御齒に砂のさはりければ、御料理人を召して、汝が好む物ならんとて、庭前の白砂を口中に挿入れさせ、一粒も殘さず噛碎けとて責め給へば、さすが捨て難き命なれば、力なく氷を碎く如くに、はら〳〵と嚙みければ、口中破れ、齒の根も碎けて、眼も眩みうつぶしに伏しけるを、又引立てゝ、此上にても命や惜しき、助けば助からんやと仰せければ、是にても御助けあれかしと申すと、是にては如何にと仰せければ、其時彼者眼を見出して「日本一のうつけ者かな、左右の、命生きても甲斐やある。さるにても過去の戒行拙くて、汝を主と頼みし事の無念さよ。常々汝は鮟鱇といふ魚の如くに、口を開けて居る故に、砂はあるぞかし、此後も見よ、風の吹かん時は、必ず砂はあるべきぞや、此上は如何やうにもせよ、命は限りある物ぞ」と、散々に惡口しければ、それ物ないはせぞとて、頓て。其後中村式部少輔、田中兵部少輔參りて樣々に制し奉れども、人を斬り給はねば、彌々御機嫌あらくぞおはしける。さらば罪科深き籠者共を御手にかけ申せとて、毎日一人づゝ引出し〳〵、、京、伏見、大阪、堺の籠者をも、其後は假初の訴訟うつたへに出づる者も、助かる者はなかりけり。されば狩場漁の道すがらにても、肥りせめたるをのこ、懷姙の女抔は見合次第に捕りける』曰々。から惡虐淫酒がつのつて來ると、いかなる放任主義の秀吉も默つてはゐられない。それに、秀吉が秀次の不遜な態度を快く思はず、大阪城を秀頼に與へ、自らは伏見の新城に入つてからは、

秀次切腹

子女妻妾の服罪

愉快な盜賊

伏見と聚樂はにらみ合ひの形となり、秀次謀叛の噂は益々高くなる。で、秀吉は石田三成、增田長盛、富田知信、長束正家、前田德善院の五使者を聚樂に遣つて、世上流言の嫌疑の條々を糺明に及ぶ。然し、いつかならちが明かないので、こんどは幸藏主といふ尼を遣つて、秀次を途中までおびきよせ、高野山に追上げて青嵓寺に切腹させて了つた。年二十八。この間、高野山の僧興寺等の助命運動があつたが、もう秀吉は聞入れない。そして其首を七日間三條の橋にて晒させた。

秀次の幼子女五人及妻妾三十四人は、龜山城に收容され罪を待つてゐたが、秀次の切服と共に、一同は打首と決定した。彼の寵妾は一の臺をはじめとして三十四人有つたが、何しろ關白の威光を以て諸國遠離の果て迄も尋ね廻つて、上は公卿大名の令孃から下は小名士庶人の娘に至るまでの美女を召聚めたのだから皆な玲瓏玉の如き美人ばかりであつた。ことに、十六、七の素晴らしい美人が多かつたといふ。これらの嬖妾は、輿に載せて都大路を引廻しの上、三條河原に於て打首の刑に處せられた。そしてこの麗はしい首を一坎に附して畜生塚と名づけた。この嬖妾の身の上については、『聚樂物語』『石山軍記』『續王代一覽』その他に詳しい。

五　眞正直な盜賊

石川五右衞門といふ盜賊は、實に愉快な人物だ。彼は時の代表的な野武士で、時代の叛逆兒であつた。秀吉と彼とは、同じやうに下民から、そして盜賊の畑から出發したのだが、秀吉は時代の風潮に乘つて政權を盜つた。が、彼は、天下の盜賊であり乍ら太閤なぞと呼ばれる世の中の下らなさを冷笑して、眞正直

な盜賊となり、大小の盜賊(大名)共の上ん前をはねた。そして、民衆の潛在意識を代表して、痛快な大活躍をやつた。五右衞門なぞは、その智略といゝ、力量といゝ、人望といひ、どこへ押し出したつて、一かどの城主の價値はある。それが、權力の奴隸とならず、それを無視して自由に活躍したのだから痛快な筈だ。石川五右衞門は、戰國時代の一つの妖星であり豪傑の一人である。

六 妖怪變化現る

妖怪とは何であるか。幽靈の定義如何? これは、なかなかむづかしい問題である。哲學的、理學的、心理學的等々いろいろな見方がある。然し、さういふ學科的な事は、井上圓了博士の講義に讓つて、僕は、極くあたり前に、妖怪や幽靈とは、恐怖心理の生み出す怪異なものといふ事にして置く。人智が進まない頃の妖怪變化は、ただ單に驚異的、超自然的なおそろしいものであるが、人智が進步して來ると、それに、(見る者の主觀に)社會思想の影響や、民衆の潛在意識や、人情の變化や又宗教的觀念や道德的觀念やが(勿論自覺的ではないが)加つて來る。この戰國時代には、『森傳助の怪異』とか『蘇鐵樹之怪異』とか『ぶらり火』とか『備後夫妻の幽靈』とかといふものがあるが、それは、殺人者が良心の苛責に堪え兼ねて見るものか、佛教の因果説が生み出した幽靈である。『蘇鐵樹之怪異』なぞは、古木に對する人間の原始的怖れと、法華經の有難味の具體化によつて出來上つたものだ。『森傳助の怪異』――『爰に怪しかりけるは、松永久秀が功臣森傳助好久、信貴山落城の後は筒井順慶が幕下にありて、祿數多領し居けるが、每夜臥所に入て枕に付ば、夢ともなく幻にもあらず、松永久秀血汐に染し直垂を着し、亂れ髮の間より怒れる眼逆に

妖怪變化

畜　生　塚

裂け、突息は炎の如く、傳助をにらまへて、我信貴山に大敵を引受け、健氣に防戰成しつる程に、織田の勇兵攻めあぐみ、勝敗さらに別れざりしを、汝が姦謀にあざむかれ、堅城忽ち粉と成て、父子主從刄に臥、無念の生害なせし事、皆汝が所爲ならずや、早く來て我と倶に修羅の苦みを蒙れよと、飛かゝつて捕へんとす、傳助恐れ驚き、刀を持て薙拂へば、陽炎の如く稻妻に等しく、爰に隱れ彼所に顯れ、罵る聲彌高く、終に一團の炎と成りて飛行けば、窓の隙白々と明渡り、苦しき夢はさめにける』曰々――これは、明に民衆の潜在意識と道德的觀念と良心の苛責によつてつくり出されたものだ。それが證據には、森傳助は最後に神心亂れ、自分自らが物怪となつて狂死してゐる。『ぶらり火』の書出しにはかう書いてある。「人正しからざる時は必ず妖發る。正路に歸して行ひに釁なき時は、妖氣自然にして發する事なし、故人曰く、妖は人に由つて興ると、宜なる哉、神通川の合戰、佐々成政小勢を以て大軍に對し、戰ひ未だ半ならざるに怪風起り、數萬の幽鬼（註――これは成政が愛妾早百合の一族を無實の罪によつて獄門にかけた怨恨のあらはれだといふ）顯れ出、他人の目には見えざれども成政一人を苦め、忽ち敗軍と成りし事、妖怪の業ながら、少しく其謂なきに非ず」曰々と。けだし幽鬼の現れる原因の道義的説明であらう。

これらの妖怪は、いかにも戰國時代式で殺風景であるが、これが江戸時代に入り、人情が益々デリケートにせんれんされて來ると、その妖怪や幽靈も人情味が豐かで、たとへて云へば藝術的になつて來る。日本の妖怪幽靈界へ、支那のそれがどの程度で、どんな形で入込んで來たかと云ふ事は、可成り興味のある問題だが、こゝでは話し込んでゐるいとまがない。

芝居の光秀　光秀の苦衷　暗殺請負業　首泥棒　首拾ひ

七　母殺し、暗殺業、首拾ひ、阿國歌舞伎、遊女歌舞伎

芝居で演ると、明智光秀は、おそろしい形相をし、槍を小わきにかゝへて、夕顔棚の暗影より現れ出で、いゝ心持に風呂に入つてゐる母を、ものをも言はず突殺して仕舞ふ。そして、觀客は天下一の親不孝者とのゝしる。けれども、事實の光秀は、主君信長のために、窮餘の非常戰策として生母を、丹波の波多野秀治に人質に渡したのだ。ところが、光秀が秀治を誘殺したので、秀治の部下が彼の母を殺して了つたのだ。即ち、彼は、實母を主君の犧牲に供したのである。光秀は、完く氣の毒な親不孝者だつた。天下一の親不孝者どころか、却つて彼は、戰國の武士の苦衷を涙にして嚙んだにちがひない。

どうせ、戰國時代のことだ、人を殺して榮達をはかる世の中のことだ。謀殺、虐殺、暗殺等は、日常茶飯事として行はれた。ある本に、この頃から德川の初代へかけて、暗殺請負業が現れた事が書いてある。伊太利では、一八八四年の春これが現れ、立派な商賣になつたさうだ。フランス革命當時や又、帝制時代の末から革命前後のロシヤにも盛んに現はれた。但し、ロシヤのは主義のためにやるので、商賣ではなかつた。我明治維新の前後に出沒したそれも、主義主張のために行ふので、商賣にやるのではなかつた。戰國時代のは、一種の商賣だつたといふ所に、變態味がある。

「首泥棒」――これも、戰國時代獨特の一つの商賣だ。他人の生命懸けで取つた首級をそつと失敬するか又は强奪するかして、勞せずして手柄をいたさうといふ頗る卑怯でずるい商賣だ。「首拾ひ」――これは、戰爭がたけなはな中は、どこかの穴へでももぐり込んで顫えてゐ、戰爭が終ふ頃になるとのこのこ出掛けて行つて性のよささうな首を拾つて歩くのだ。かの手負ひの落武者や、かのか弱い若殿と子女の一行などを不意に鎗かげから突刺したりする手合は、かうした連中の仕業だ。兩者とも、勿論、武士の風上に置ける人物ではなく、身分も役も輕い二股人足である。軍記物の秘書の中には、彼らの狡猾な活躍振りが、一つの滑稽として書かれてある。

桃山時代の諸藝復興　阿國歌舞伎　遊女歌舞伎　太夫のはじめ

豐公天下を一統し、聚樂城に華美榮耀の享樂主義の生活をはじめられた頃を、桃山時代といふ。血みどろの修羅の巷のあとで、この華美華麗な桃山時代が現出すると、順次に經濟界は回復し、(この回復をより多く助長したものは、從前の不便な永樂錢、砂金、板金に代えるに、石見、佐渡、伊豆等より掘出した金銀を以て造つた天正金、慶長金(大判、小判)等の便利な貨幣を使用したのに因る)諸藝はさながら春に會つたやうに甦つて咲競つた。かくして、上下は擧つて、華麗豪奢な生活に醉つた。かの出雲阿國に依つて創舞せられたといふ所謂阿國歌舞伎は、この時代を背景として生れたものである。日本の演劇が戰國時代の虐げられし女によつてはじめられたといふ事は、社會的にも藝術的にも興味のある問題だ。そして、これに刺戟されて起つたのが、遊女歌舞伎である。この遊女歌舞伎といふのは、その頃未だ歌舞を嗜んだ遊女たちが、年に二三回づゝ、京の四條河原に集つて芝居を演じたのを云ふので、この折の能太夫は皆遊女がつとめたのであるが、そのうち演技すぐれた者のことを太夫と稱するに至つた。この遊女歌舞伎には、諸大名も見物に出掛ける程で、頗る陶情華美を極めた。

武家的野心の代表

支配階級的慘酷性

家康の無駄骨

第九章 徳川時代 (上)

一 家康の無駄骨折

徳川家康は、六歳の時に今川氏に質子として遣られたのを手初めに、具に世の辛酸を嘗め、あの戰國の大舞臺を大膽不敵に乘切り、美事に征夷大將軍となつて徳川幕府二百六十餘年の基礎を創設した。秀吉は、民衆意思の爆發として天下を盜つたのであるが、彼は、武家的野心の代表者として天下を盜しめたのである。彼は、不遇の時に於ては飽く迄忍耐強く、戰爭にのぞんでは飽くまで大膽不敵にやつてのけ、天下を掌握しては「油斷大敵」の四字を守つて、細心堅實な政治組織をつくり上げた。彼は、武家的理智の人、努力の人だ。家康は、支配階級意識に徹した人物で、自家の權力を永久に維持するために、諸般の法令規則を設け(公卿法度、武家法度等)頗る嚴確に天下を統御しようとした。彼が風紀肅正の名に依つて行つた文教興進、士農工商の階級制度、極度の戀愛壓迫、勤儉奬勵等は、皆な彼一流の自我主義的天下支配術である。自家擁護のために、武士に絶對權威をもたした惡階級制度を造つたのも不自然であるが、自家の利益のために手前勝手な法制を以て他人の人情まで壓迫したものも、支配階級者的殘酷性のいたす所だ。尤も、民衆の慘害壓迫の上に天下を盜む者などは、皆なこの種の狡猾な變態人情家なのだ。不義は御家の法度といふ規則も、『男女七歳にして席を同うせず』といふ反人情的な女大學式家庭訓も、皆な武家に徳川家をより強固に守護させる手段に過ぎないのだ。だが、いくら家康が苦骨を折つてでつち上げた眞人情

天意人意に勝つ

日本婦人の精華なる奴隷道徳

性慾的服從の强制

町人の人情美

頗る殘忍酷烈

婉曲の法制も、元來が人間が無理に造り上げたものだから、自然の本能的意思には敵し難く、極めて順調に破壞されて行く。(たとへば、戀愛壓迫は、變態性慾の男色を畸生し、却つて淫蕩を生み、かの勤儉奬勵は、元祿その他の華麗豪奢を釀生し、町人よく壓の階級政策は、いつしか士風と共に壞亂して、所謂町人時代を現出したるが如きがそれである。又かの婦人の凡ゆる美徳をそなへた筈の御殿の女中どもから、限りなき虚榮心と嫉妬が生れ、彼が卑下し厄介視した町人の廓から眞人情が生れたなぞは、さすがに彼も豫算に入れなかつたところであらう。

家康が、自分の時代に對して持つた宋學派の道徳政策は、戰國時代以來、絶對的服從の觀念に支配されて來た女性を、いよいよ男子の奴隷、家族的犧牲者として了つた。こゝに、道學者共の謂ふ「日本婦人の精華」なる女子奴隷の風習と道徳が生れたのだ。

だからでもあるまいが、家康は秀吉以上に妾を蓄へた。しかも秀吉が上淫を好んだのに、彼は鍛冶屋の女房でも士卒の妻でも本陣の飯炊でも、何でも彼でも、手當り次第に情慾的服從を强ひた。

家康の血統には、大分變態人情家がある。そして、徳川十五代には變態人情的事實が、無數に現れた。日本の歴史の內、最も人情的に、興味深いのは神代の純心人情と此の徳川時代の町人の創造した人情味であらう。

二 殘忍酷烈の事

二代將軍秀忠は、繼體守文の德をそなへてゐたさうだが、一面、頗る殘忍酷烈だつたといはれる。「細川

家記忠興譜」に依ると、秀忠は朝廷に對して不敬僭上の暴擧を多くしたのみならず、つひには

と書いてある。然し、これは一つの自家擁護の

政治的罪人だつたのだらう。少し後には三代家光と將軍職を爭ひ、兄であり乍ら退けられると、大いに兇暴殘忍を働き配所に自殺をとげた人物に駿河大納言忠長がある。然し、彼の狂疾日々はどうも當てにはならぬらしい。

愉快な男

慶長十二年の春に、駿河興國寺の城主天野三郎兵衛尉康景は、たつた一人の罪のない足輕を救はうとして、萬石の地行取を捨ててしまつた。當時にしては一寸、愉快な男だ。

爲人獰猛

家康の孫松平三河守忠直は、政治的不滿のために、性來の狂暴性を益々つのらせ、朝夕酒色に耽つたのみならず、お終には殺人鬼となつた。彼は、少し癪に觸る事があると『男女の差別なく立處に討捨て、竟には兇行募りて樓上より往來の人を銃殺

人情的事件

かの元和元年五月八日大阪城陥落の非常時に、石見津和野の城主坂崎出羽守孝親は、猛火をおかして芝谷樓に舞り込み、秀忠の長女千姫(秀頼の北の方)を救ひ出し、家康の行營に奉じ、約言通り、卽座に姫を賜つた。所が千姫はぜいたくにも出羽守の醜男(猛火で燒たゞれたから尙更)を嫌つて、本多忠刻のところへ入輿する事になつた。それを聞いた出羽守は、武士の名譽と情怨のために非常に憤慨し、千姫の輿入の日に、勢州桑名に待ぶせして、姫を强奪しようとした。けれどもその謀計は成功せず、政府執政の人々におどかされた家臣牧野勘兵衛等に依つて、酒毒のはかりごとにかけられ、醉拂つて晝寢をしてゐる所を難

刀で首を刎ねられて了つた。(幕府へは自殺させたつもりにしたが)この事件は、よく考へると、頗る人情味のある事件だ。家康の心情、千姫の個性、出羽守の怒り、皆なそれ〴〵に人情的だ。

辻斬りの事

德川時代の惡武士共は、百姓町人を、犬猫のやうに心得、夜間街頭に於て、遊戯的に慘殺を行つた。所謂「辻斬り」といふのがこれで、戰亂の直後で、殺伐の氣風の未だ拔けなかつた元和寛永頃には、この惡武士共が、盛んに江戸の暗闇に出沒し農工商の人々を苦しめたといふ。この殘虐性の惡戯や新刀だめしの殺傷は幕末の頃迄盛んに行はれた。家康の階級制度の生んだ、最もなる罪惡の一つである。

吉利支丹のこと

我國へ吉利支丹宗の入つて來たのは、足利義輝(西暦一五四九年頃)の頃で、戰國時代の初めには非常に榮えたが、秀吉の壓迫に遭つて一時沈潜したのが、又、德川時代に至つて殉教の形で信仰されはじめたのである。德川幕府が、吉利支丹信者に、極端に殘酷悲慘な迫害刑戮を加へたのは「島原一揆」勃發前後の寛永(二十年間)年間である。今考へると、隨分野蠻無智な變態的迫害を加へたものである。

變態的迫害

この酷烈な迫害や殉教者の受難の有樣は「日本聖人鮮血遺書」に詳しい。

三　一揆は人情

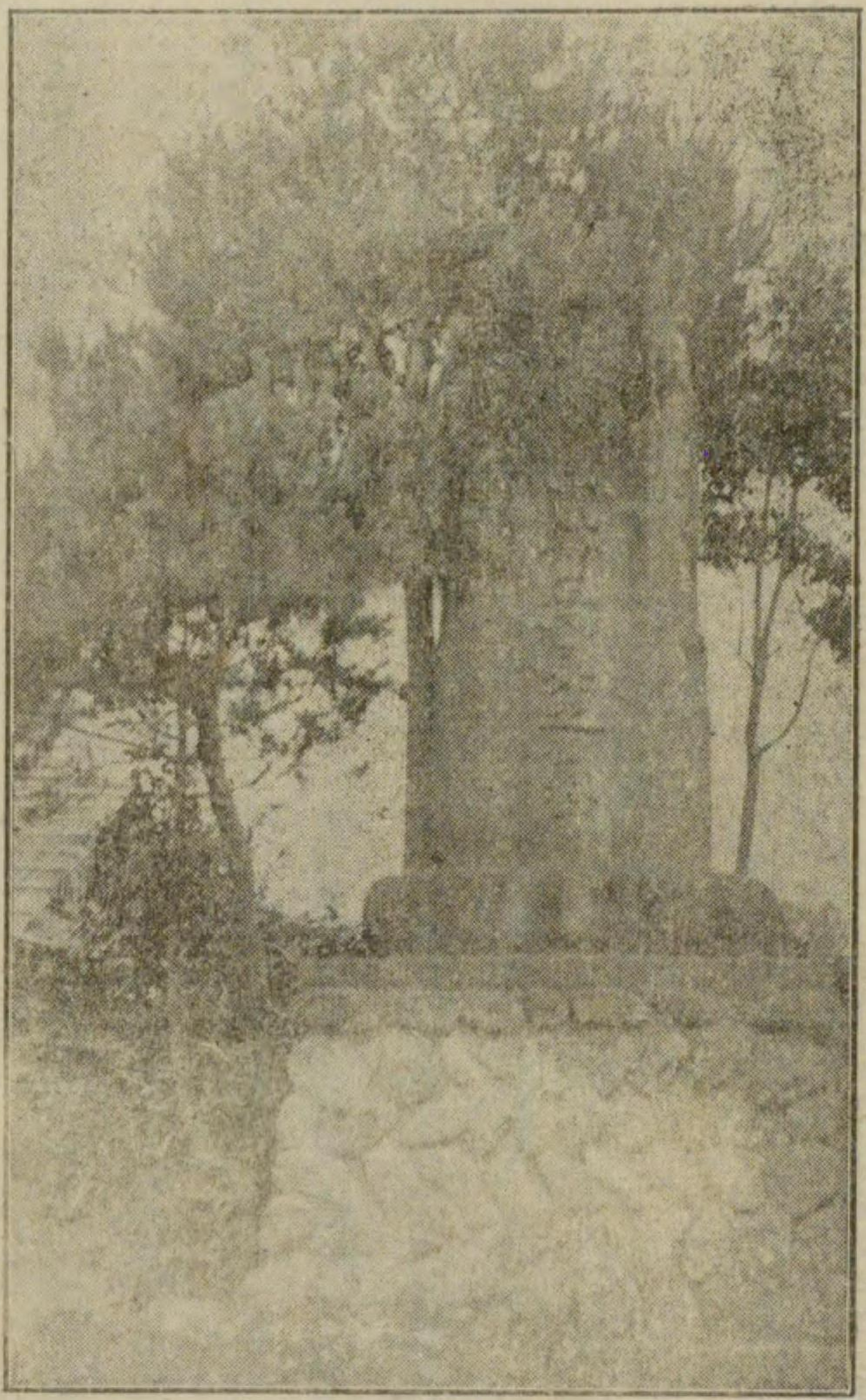
一揆のいろ〳〵

一揆にもいろ〳〵ある。『吾妻鏡』や『太平記』に現はれた武人一揆。(これは武人が侵略的目的か單に人殺をしたさに集るもの)又、前述の『島原一揆』の如き、宗教的熱狂徒(多く平民)の反逆的(他宗又は迫害者に)一揆。又、土民一揆、百姓一揆、米一揆、町人一揆等。(この種の一揆は純然たる階級爭鬪で、德川時代には、寶曆四年の久留米一揆、天明七年の米一揆等を大なるものとして小なるものは四十餘りあ

慶安太平記

民衆の潜在意識の憤火

る。）慶安四年七月、訴人に依つて暴露した天下の浪人由井正雪、丸橋忠彌等の陰謀事件は、武人一揆の一種である。



「由井正雪公の墓」靜岡市外安川川畔にあり

風俗亂る

四　風俗壞亂の第一段

德川幕府は、實にひんぱんに、風俗取締や尙武令を出してゐるが、大奥自らがそれを裏切るので、直きに風俗壞亂の世相を現出して了ふ。既に三代家光の頃には、將軍の病氣鬱散とあつて、能狂言師、琵琶法師等を大奥に召されたのを切かけに、上下に歌舞が流行し、風俗が柔弱淫靡に流れはじめた。『德川太平志』は曰ふ「大奥の好尙斯くの如くなれば、其の風自然と下にうつりて、市中端々までも何時となく、歌舞の流行盛んなるに至りぬ。諸大名は素より幕府を憚るにより自然に武邊を捨てゝ行儀作法を習ふを專らとし、能よ囃子よと、持てはやすことゝなり、旗本の若士等もこれに連れて、武藝を餘所にして歌舞伎芝居にふけり、果は喧嘩口論を仕出來すことも度々なり、それのみならず市中に風呂屋といふもの出來、こゝに垢かき女といふを置き（註――この湯女は既に足利時代からあり）遊樂に資せしかば若侍等興ある事に思ひて我れも〳〵と日夜そこに押掛け、果は市中のあぶれものと口論を仕出かすといふ風俗頽壞の基をなせり」と。そして又この一方では殺伐粗暴の徒も跋扈したといふ。

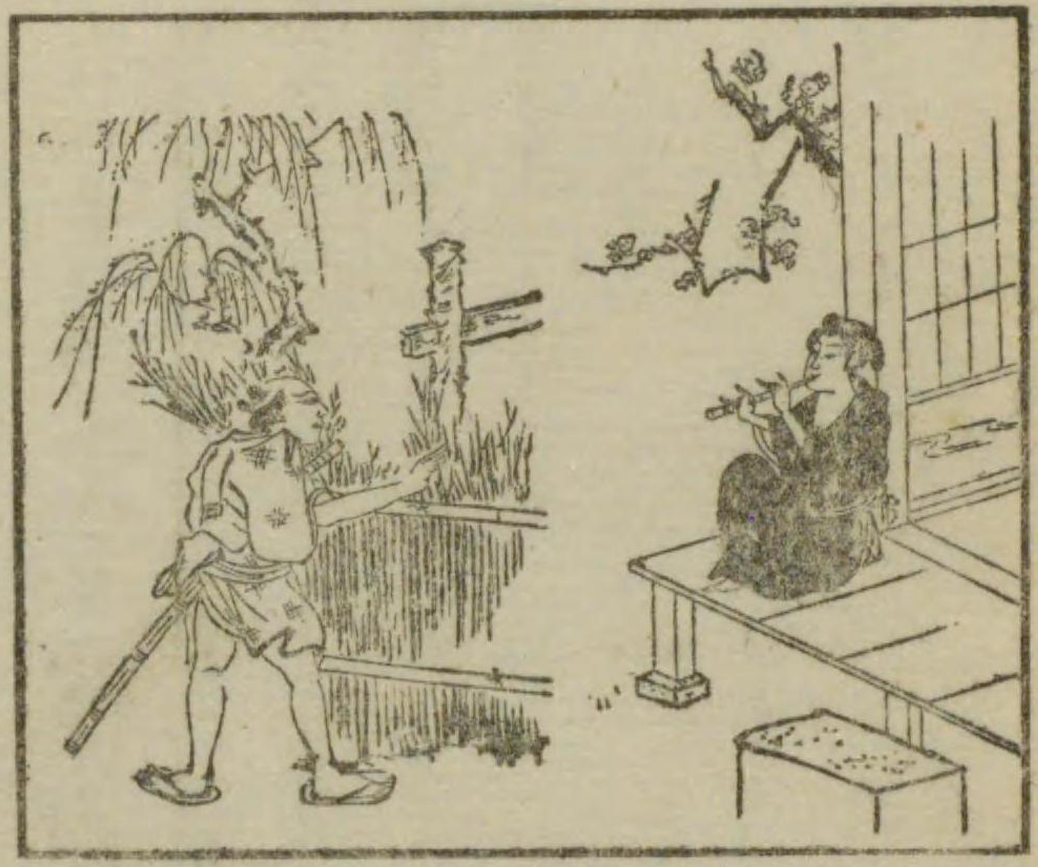
丹前姿

歌舞伎者

この風俗の壞亂は、四代家綱の大奥の亂脈沙汰（大老酒井忠清老中稻葉正則等と飛鳥井、姉小路兩上臈の結託に因る）當時を通じ、益々甚だしくなつた。かの『長髪の月代に立髪を結び、伊達なる一つ布子に長き大小を貫の木差しにして、大手を振つて』通つた變態風俗家（丹前姿）が現れ、又、歌舞伎者といふ中小姓以下の者が『天鷺

江戸の湯女

絨の襟ある衣を着し、大撫付立髪、大鬚をつくり、大刀大脇差をさして遊行し」（三代家光は春日局を大いに心配させて自ら姿をさがしてあてがつた程男色愛好家であつたから、上の心下町人が眞似、武士、僧侶の間に男色大流行を來した。この歌舞伎者はその男娼の一種で、後の芳町のカゲマの先驅者だ）又、町奴と稱する遊俠の徒が（後年の俠客はこの中の優れた者）亂暴



戰國時代の男色

明和安永頃の芳町の陰間

狼藉を働き初めたのは、この頃からだ。

江戸町人喧嘩を好む

好學の裏

元祿文學の母

矛盾將軍

犬は人間以上に尊いと云ふ學理

第十章　徳川時代（下）

一　人間は畜類の家來

五代將軍綱吉は、頗る學問好きで、大いに文學藝術の奬勵を計つた。德川十五代のうち、綱吉程讀書研學（ことに儒教）に熱心な將軍はなく、自ら近臣、諸大名、諸有司に鞭策教諭をして、凡ゆる學問の振興の道を開いた。綱吉は、時の秀れた儒者學者を破格に優遇したのみならず、民間の一道一藝に達した者を各方面より拔擢して用ひ又、幕府最初の官立學校『聖堂學問所』を造つて天下育英の根源とした。綱吉は、天禀的に學問が好きには違ひなかつたが、それをより熱度を高めたのは、彼の侍妾常盤井の局であつた。この常盤井の局といふのは後に右衛門佐局といつた人で、當時ならびなき女流文學者であつた。この局が、綱吉をして、學問をいよいよ奬勵させて、日本文學の蠱惑の華となつた元祿期の文學を生ましたのである。

それは扨て、此綱吉は、甚だ性格的に矛盾の多い人物で、一方に聖賢の高道を說くかと思ふと、能樂にこり固つたり

又、口にやかましい勤儉を唱へ乍ら、惡貨幣を濫發せざるを得ないやうな華美驕奢な生活をしたりした。のみならず、淺慮愚昧にも、護持院のおべつか坊主隆光の迷言なぞに乘せられて、かの開闢以來の極惡令生類を保護憐愍する嚴命（殊に犬を）を出した。（尤も、この人畜顚倒の妄說を最初に吹込まれたのは母桂昌院である。桂昌院は、隆光に深く歸依し寵敬して

前代未出の惡令

犬の御屋敷

怪令の犧牲者一斑

ゐるので、隆光のまことしやかな迷言にすつかり感心して了ひ、直接綱吉（戌年生れ）にすゝめたのだ。綱吉は、丁度氣數循環の理を硏究中だつたが、學理上さもあるべしとさん成し、且つは母への孝養の一端として早速變態的嚴命を出させたのだ。途徹もない學理や孝行があつたものだ）これこそ正札附の變態人情で、この布令では、人間は、犬や猫や鳥の番人家來だといふ馬鹿化た事になる。この『犬の事（貞享二年には犬猫だけだつたが、元祿には生類一般となる）從來の如く無慈悲なる取扱ひ致すべからず、萬一違背のものは吃度嚴科に申付くべし』といふ迷信的な生類憐愍の弊令は、上下の階級を通じて前代未聞の惡結果を來らした。大名には、『城附きの犬』といふ滑稽なものが出來、犬の籍は人間よりもつと確かに造られ、大久保（二萬五千坪）中野（十萬坪）には野良犬十萬疋を愛養する犬屋敷が出來た。こゝの犬一疋の一日の食料は、白米三合、味噌五十目、干鰯一合づつの割合で、なかなかぜいたくな暮し向きだつた。此の生類憐みの弊政のために殺された無辜の民の數は、實におびたゞしいもので、記錄に現れたものだけでも枚擧に遑がない程だ。完く、迷君綱吉や、その惡風を助長した佞奸柳澤（彼も戌年だつた）は憎むべき馬鹿者だ。

門番が門上の雀鳩を追つて卽日御役召離の上閉門。それを密訴した下男は御譜代に出世。小供が吹矢で雀を吹いても、斬罪、遠島。病馬を荒地に捨置いた武士と百姓二十五人は配流。百姓の難澁を救はうとして畑を荒し廻る猪を、打取つた寄合佐野の家來は獄門。主人は逼塞。本所の町人孫太郎は犬を切つて獄門。石町に住む浪人筑紫門右衛門は政府の怪令を悲憤した『馬物いひ』を著し、引廻しの上獄門。大阪定番松平縫殿守の預りの同心達は、大阪在番の折、鳥を打取つて食つた事が知れ、打てる者食ひし者の十一人は切腹、その子は悉く遠島。猫が誤つて井戸に落ちたのを見てゐて遠島。犬の喧嘩を留なかつた町人獄門。犬

を盜賊にけしかけて閉門を喰つた武士……等々、數限りない犧牲者がある。

士風頽廢

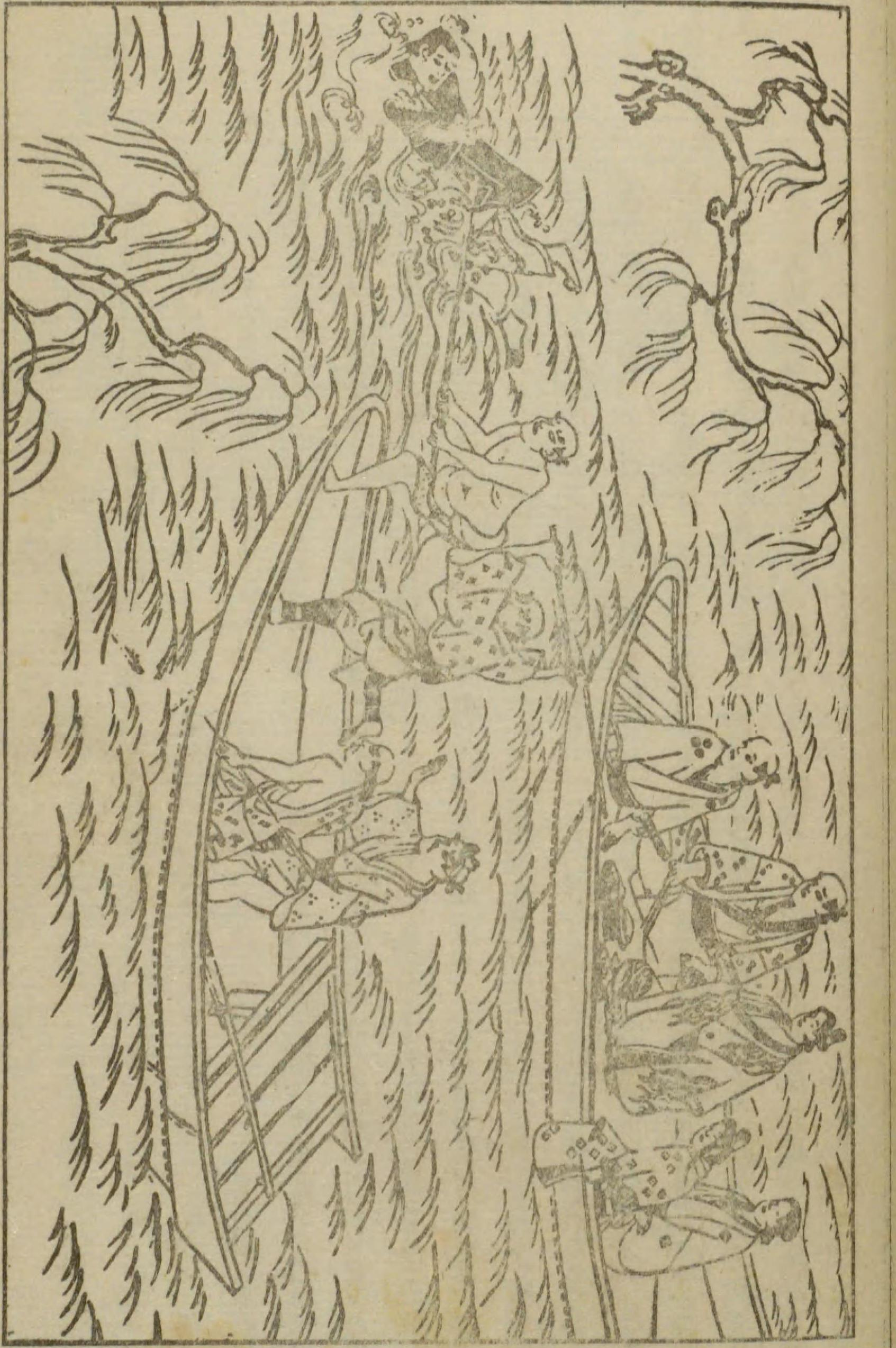
平民藝術

遊廓全盛

二　驕奢淫靡の極

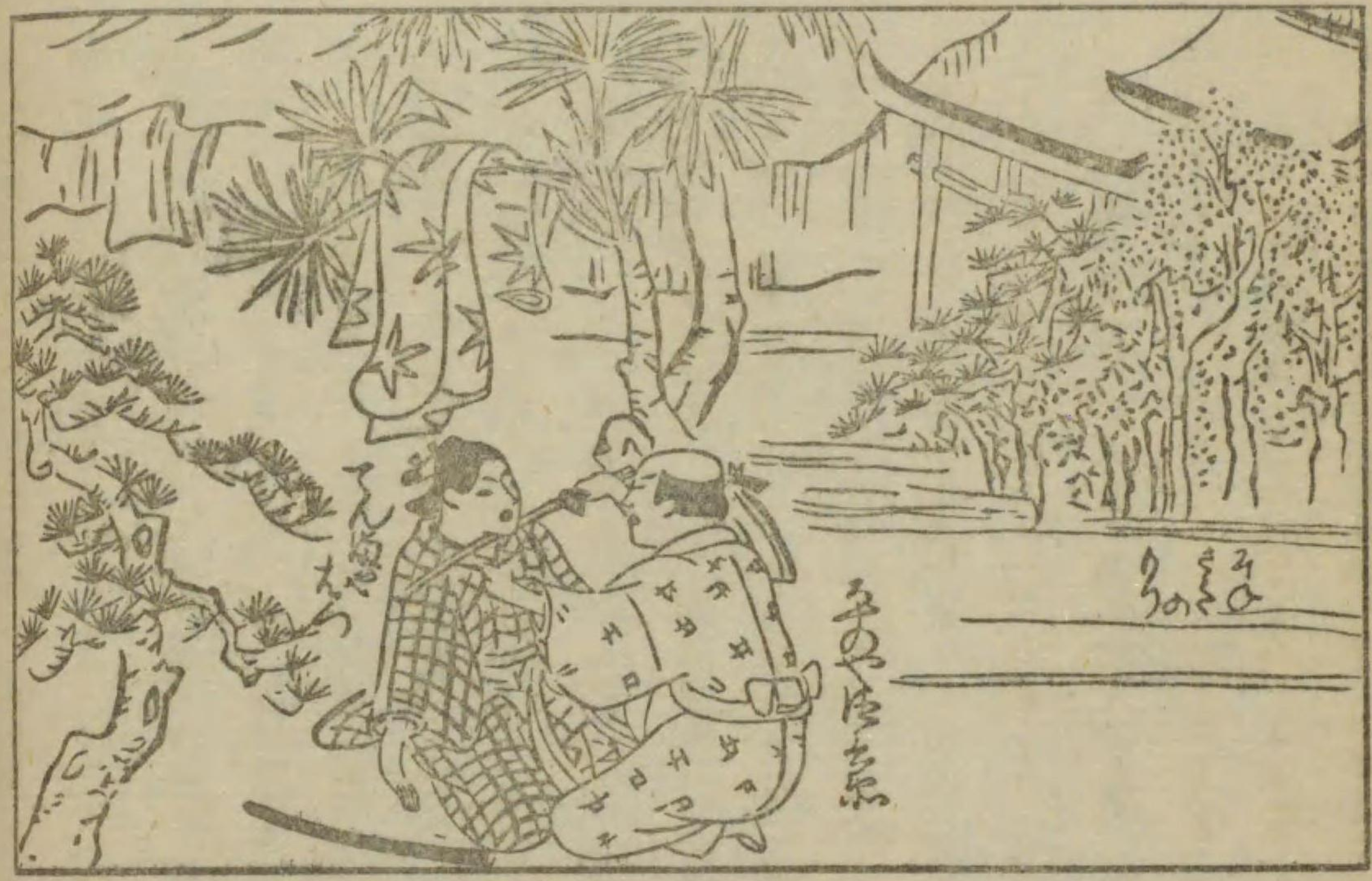
德川時代を通じて最も驕奢淫蕩を極めたのは、元祿及その前後であつた。矛盾將軍綱吉は、一方に盛んに凡ゆる風俗に關する禁令を布告し乍ら、一方に於ては、自ら風規紊亂のもとを造り出してゐた。綱吉は大奥に能樂大流行の遊惰柔弱の軟風を渦起してゐたのみならず、旗本の子弟の美貌なる者を驅り集め今樣風流(元祿踊)なる淫靡な踊を踊らして樂んだ。何しろ、殺生嚴禁のため弓砲の武術は無駄となつてはゐるし、白粉臭い柔弱な藝人風俗は上流階級に益々滲浸するし、將軍からして此の華奢遊蕩だから、上下の風俗はとう〳〵として遊惰、驕奢、淫靡に流れた。この間に於て、平民階級は著しくその地位を高め、彼らによつて創られた所の平民文學、美術はこの世相を益々平民化して行つた。今迄、不自由で嚴格な武家の生活をしてゐた者たちが、自由で自然的で人間味の深い町人の生活に接すると、ひとりでに非本能的な堅苦しい形式的生活から脱し、人間性に立脚した町人生活の中へ同化して行つたのは、蓋し當然であらう。そして、家康の政策した士農工商の階級的觀念は、いちぢるしく動搖し、かの士風なるものは、いよいよ衰頽した。こゝに、今迄の反動として、華々しい自由戀愛の時代、又、奢侈淫風の時代が來たのである。

かの家康の治國策の一つであつた天下御免の遊所は、(江戸では柳町時代から元吉原時代を通じて)その後益々發展し、元祿時代に至つて、全國的に大いに隆盛を來した。(新吉原第一期の隆榮。第二期は寶曆明和以後)然し私娼は(岡場所)嚴禁の直後の事とて、稍衰えてゐた。當時の有名な遊蕩兒に椀屋久衛門(貞



大阪の遊蕩兒椀屋久[illegible]門[illegible]町の遊女[illegible]色香に迷ひ狂[illegible]して水死するところ

心中流行
通と粋
淨瑠璃の排情的暗示


曾根崎心中（心中大鑑）

享?、大阪）大佛師民部、多賀蝶古（後の英一蝶）村田半兵衛、六角越前守、井伊伯耆守、本庄安藝守、紀國屋文左衛門、奈良屋茂左衛門、同弟安左衛門等がある。

　この元祿前後半世紀程の間は、種々な意味で江戸文明の最頂天である。一方に於ては、道德觀念が固定し、一方に於ては人情生活が自由に解放された。こゝに兩者の葛藤があり、人生の波瀾が生ずる。しかも、未だ寛暦明和の通を生まず、文化文政の粋とならざる、裸のまゝの人情味の濃厚な時代であつたから、必然の如く心中なる社會的新現象が起つた。この心中なる情海の瀾華は、京阪に起り、江戸にうつり、全國的になつた。この心中流行に抒情的暗示を與へたものに『心中大鑑』と『近松物』がある。就中、近松門左衛門の麗筆に成つた眞人情の精華の寫破は、戀愛は心中に至つて極るとさへ思はしめた。近松の心中淨瑠璃を、變

變態的心中
貴婦人の役者買
繪島の身分
大亂痴氣
不自然な愛慾生活の生んだ悲劇
天龍院と大吉
役者は呉服物

態人情的に觀て行くと可成り新しい發見があるが、こゝではそのいとまがない。近松につゞいて心中淨瑠璃を書いた作者に、『袂しぼり』『なんば心中』『梅田心中』等の紀海音、『近頃河原達引』の中村重助、『桂川連理柵』の菅專助等がある。人情的説明やその種類に就いては前述した。この挿畫のうち、『屛風も顔も千枚張』とあるのは、刄物を以て先きに女を殺したが、自分の番になると怖氣がついて逃げ出した男が、表具屋の伜だからだ。これは、變態的心中とでも云ふべきものだが、この頃新聞を讀んでゐると、かう云ふ事件が少くない。蓋し人情が薄くなつた以所か？

　如何にも華美遊惰時代（正德四年）らしい代表的男女關係に、繪島生島事件と、天龍院と大吉事件がある。この事件は、大奥の生活の性的不自然さと、貴婦人の生活の放縱さと、歌舞伎の弊害との生んだもので、數ある役者狂事件の裡で、いさゝか景氣よくやりすぎたので、曝露したものである。繪島は大奥に於て六百石を領する御年寄役で、月光院（家宣の妾、將軍家繼の生母）の寵を受け、隨分羽振を利かせてゐた。繪島は月光院の代理として增上寺の御靈屋（家宣の命日）に參詣した歸途、山村座に立寄り、寺への御包金七十兩銀二貫目、其他呉服が澤山あつたのを、大半誤魔化して、兼て深い仲の座頭生島新五郎を

　　娘を然る可き者の娘と僞つて自分の部屋に使つてゐたといふ）呼び、大亂痴氣騷ぎを演じた。それが表役人に知れ、繪島は伊豆俵島へ流罪と決定、但し月光院の同情にて信州高遠の內藤駿河守に預けられた。この時年三十三。少し可愛さうだ。それと同時に生島は三宅島へ遠島。年は男盛りの四十四。この事件に關係あつた者は流罪又は追放。山村座は興行停止。次の天龍院といふのは、尾州公の未亡人。大吉といふのは生島新五郎の弟。天龍院は、日頃出入する本町の呉服商伊豆藏の手代に、密かに役者

大正の陰間

敵打は蠻風

忠臣藏

大遊蕩兒

金は湯水

の取持を申付けた。と、その手代は、奇計をめぐらし、役者七人を呉服物と僞り長持に入れ込ませた。ところが、大吉一人が家老に嗅出され、藏の中へ投り込まれて了つた。で、とう〳〵事が露顯し、大吉は五貫文の科料、（後に發狂）を食つた。この二つの愛慾事件で、一番問題となるのは、大奥といふ女護の島の　德川時代の役者達の變態的な生活振りである。大正の今日でも陰間の如き俳優が隨分あるのだから、德川時代の河原者が、何ら人格がなく、浮氣な女共の玩弄物であつたのは當然かも知れない。

德川三百年を通じて一番敵討の多かつたのは、元祿時代だ。敵討は報復的慘虐性から出發するもので、可成り野蠻なものである。敵討は、『古事記』に現れた、眉輪王が父大日下王子の害されたのを恨んで　を最初とし、（紀元千百十四年）中世の公曉の敵討、曾我敵討、宮本武藏の敵討その他四五回の敵討があつた。戰國の末から德川期に入ると、その敵討に、武士道々德の裏打ちが出來、一種の美擧の如く思はれた。元祿には龜山の仇討、本所の仇討をはじめとして五つの敵討事件があつた。このうち本所の仇敵（所謂忠臣藏）は、武士の忠義思想の完全な現れとして、又仇討事業の一つの奇蹟として、又遊惰時代の痛烈な刺戟として、多くの敵討事件中最も戯曲的にして興味深いものである。

吉宗將軍の頃、二人の大遊蕩兒があつた。もう、この頃は、町人が黄金で天下をどつてゐた時分なので所謂分限者共は、隨分メチヤな放埒をしたり、大名をもしのぐやうな豪奢振りを發揮したりした。兎角、權力とか金とかといふ者は、人間を狂氣にするものである。然し、金を湯水のやうに輕侮して費ひ散らすといふ事は、金權の亡者（田邊意次の如く）となるよりずつと愉快なことだ。その一人は、浪花の豪商辰己

無限の鐘

淀辰の失敗

吉宗の個人主義的政策

屋久左衞門の弟吉兵衞である。彼は『江戸に下り、兼て瀨川菊之丞狂言無間の鐘を見んと心がけしに、已に閉場して間に合はずこれを遺憾に思ひ、竟に菊之丞を大阪へ呼び登せ、己が宅內へ舞臺を設けて、其の技を演ぜしめ、吉兵衞いふやう、金をふらすときに模造の金にては興薄しとて、正眞の小判小粒を出だし、場中へ投ちらし、見物の諸人に心まかせに拾はせ』て分限鼻をのばしたり、或時には女踊子三十人を呼上げ金三十兩づゝやつて、　踊らしたりして、甥の金六百萬兩？を、かゝる下卑な淫佚放蕩に使ひ果し、竟には禁獄されたといふ。次も、矢張り大阪の分限淀屋辰五郎だが、彼は大名にも優る華奢遊蕩をし、最後には謀判の罪（死罪）まで着て、三都構ひの追放となつた。幕府といふもののからくりは、なかなか巧妙に出來上つてゐるもので、町人に金が少したまると諸大名の內用をさせ、金を支拂はなくたつて知らん顏をしてゐ、その町人が一寸でも階級意識を忘れると、家財と首を取つて了ふのだ。浪花のぼんち淀辰は祖父のためた金の故かいゝ夢を見損つた。

三　花柳人情その他

八代吉宗は、泰平の世には稀らしい政治的才能のある人物で、大いに尙武の氣風を隆興させ、又、百般の學術を奬勵すると共に、財政窮迫の救濟策を立て、（たとへば米相場を起し、荒地開墾を勵行する等。然し、この幕府にばかり都合のいゝ兩政策は却つて惡結果を來した。殊に新田開拓は、物價の下落を來し、農民困憊の原因を作つた。）前代の華麗奢侈の風を排斥して、ひたすら簡撲質素な政治方針を行つた。だから、吉宗の時代には、まるで元和寬永の世に逆轉したかの觀がある程、旗下の士風が緊張した。吉宗は、

實益主義者の風流心理

丁度今の資本家共のやうな、頗る實益主義の人物で、隅田川や飛鳥山や小金井堤に櫻を植え、中野や本所や舟堀堤に桃を植えたのも、單に風流を好んだからやつた事ではないのだ。そこには何らかの政策と打算があつた。その一斑は、城内の堤に美しき松を植えたが、その代り塀を取つて出資を助けたなぞといふ事でも知れる。

法理の變態心理者

かの法理の變態心理者大岡越前守、一種の訴訟狂石川近江守や、殺人術の大家柳生但馬守何んぞといふ人物の出たのはこの時代だ。

暗弱將軍貴公子將軍

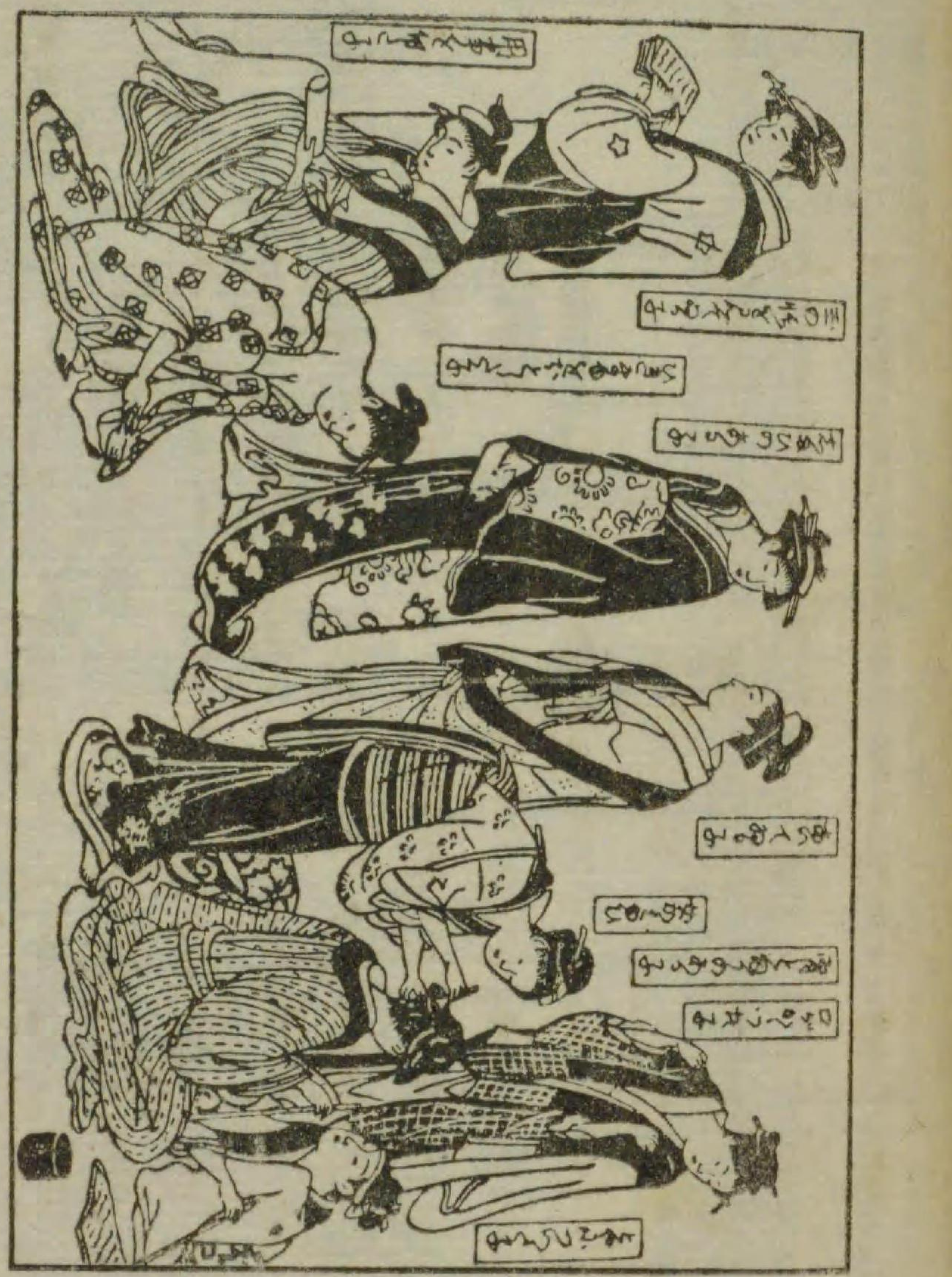
それは扨て此吉宗の尙武及簡易生活の政策の效能もたつた一代しかなく、多病惰弱な九代家重や多感優雅な文人肌の十代家治に至ると、もう、幕府の紀綱は弛廢し、(この暗弱將軍や貴公子將軍の世の特長は、役人の糞意張りと、賄賂の公然の流行と百姓にめちやくちやな苛税を課した事(九代)竹內、山縣の王政復古論、天變地異(十代等)華美淫蕩の風盛んになつた。

江戸文明のらん熟

この寶曆明和から、天明享和、それから文化文政の時代は、江戸文明のらん熟期だ。(文化文政の遊惰生活を政治の上で助長したものに、家齊の公武融和政策がある。この幕府と朝廷との交通は風俗上では、惡結果を齎らした。)將軍樣は、精神きよ弱者か、驕奢の徒であり、幕府の諸有司は大いに官紀を紊し、饗應といふ名前の風俗壞亂(藝者寄合、豪遊等)をやり、又、諸國の大名や留守居役は益々驕奢放縱に流れた。

花柳人情

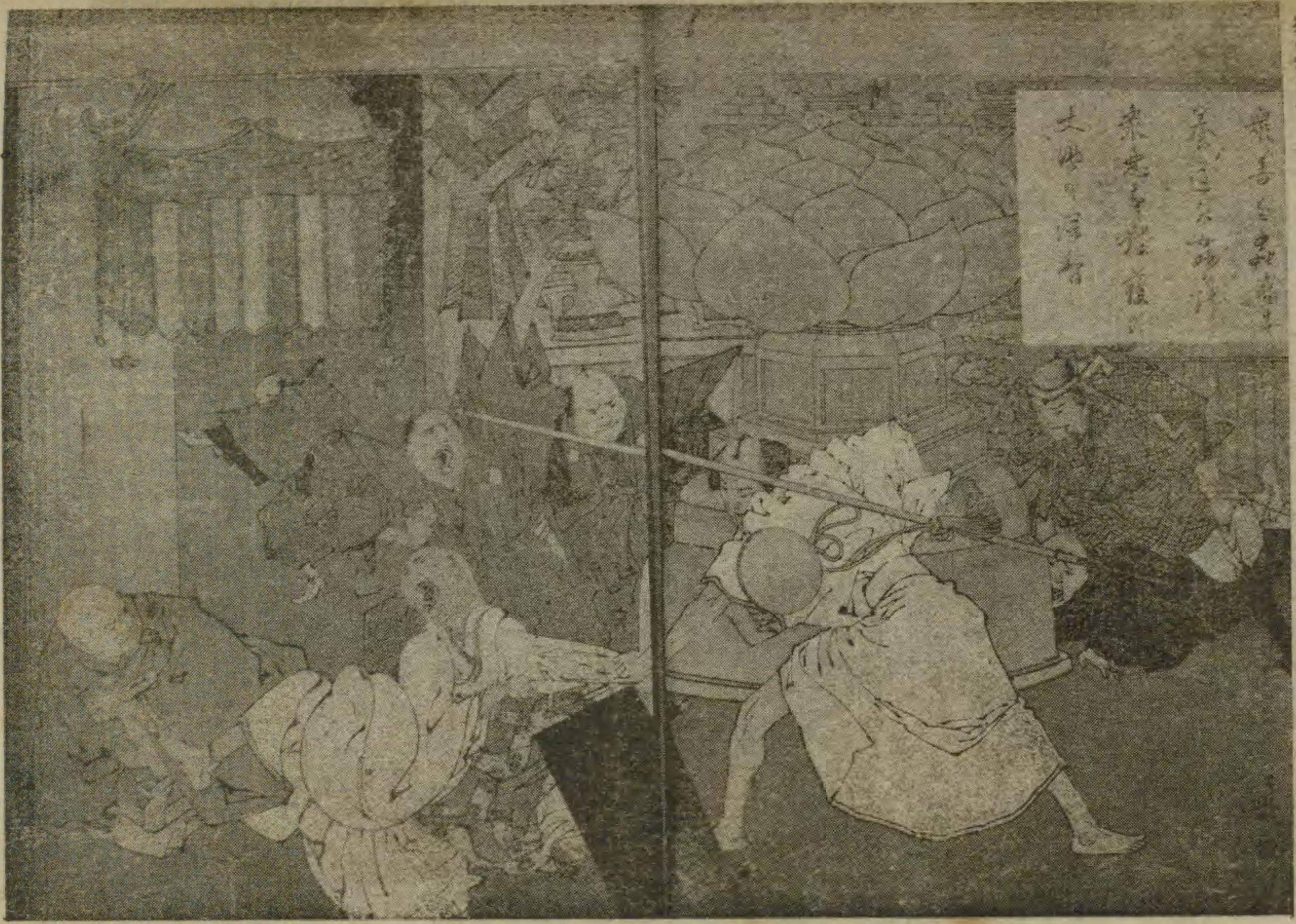
又太平になれた江戸町人の生活は、愈々遊惰、享樂的になり、前代に比類なく隆盛を極めた遊里の中で、身も魂もとろかして了つた。こゝに、江戸生粹の通とか、粹とか、乙とか、いなせとか戀の意氣地とか、酒脫とかといふ、變態的にまでせんれんされた人情が生れ、かの濃艶的デカタン美の花柳文學が生み出されたのだ八文字屋の好色本、人情本、酒落本、黄表紙、怪談、川柳、狂歌等々の平民文學がさうである。



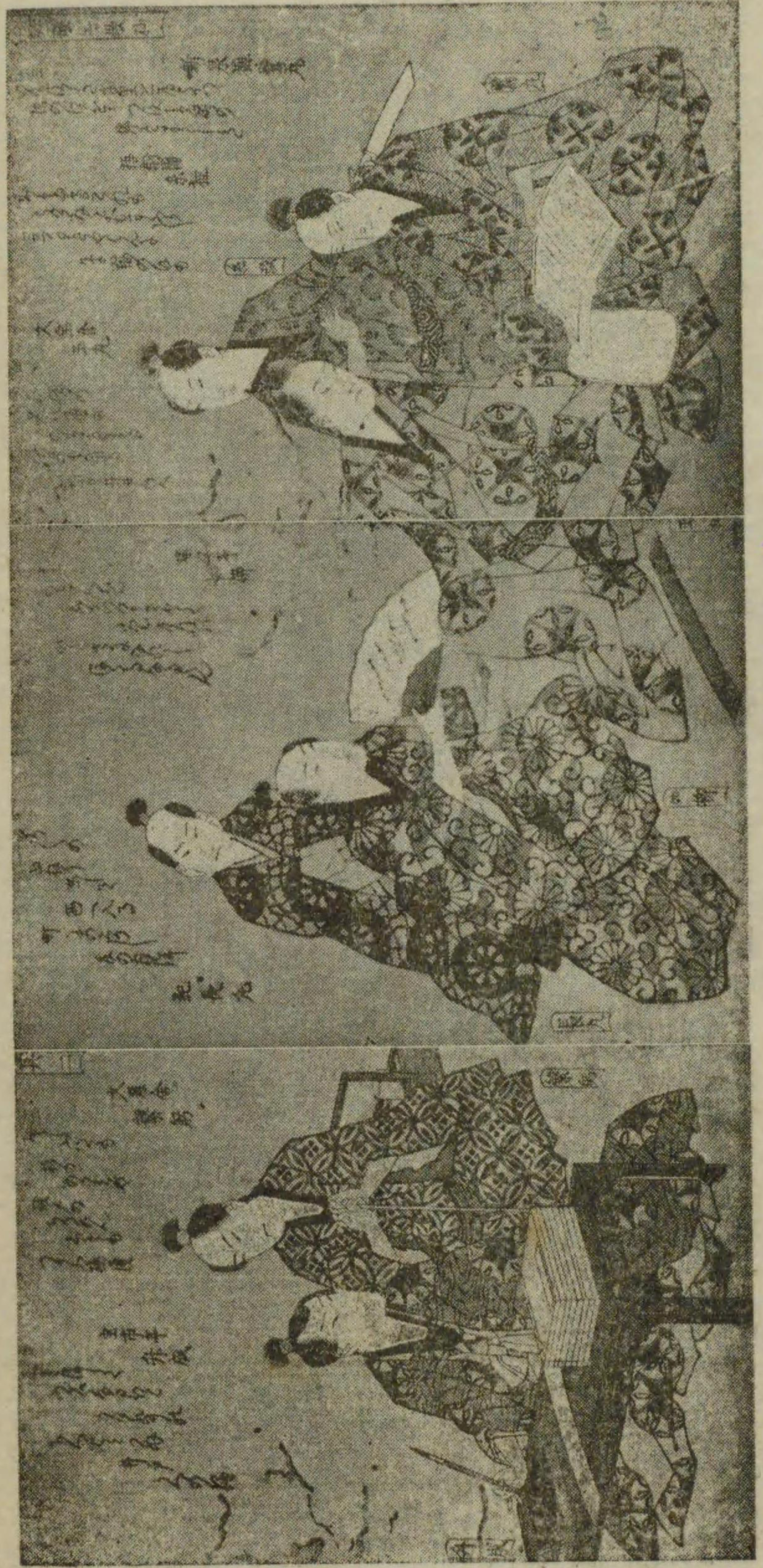
上は、深川仲町の女郎子供の部屋に於ける有樣。この子供といふは、江戸深川の女郎の特稱。この地にあつては深川藝者羽織が絶大の勢力を占めをるが故に、此地の女郎(子供)は、新吉原に比ではなく、格も下等で從つて揚錢も安かつた。(晝夜四切一分、一切十二文なりしといふ)この地の羽織子供の特長は、自家の妓樓に於てでなく、大方茶屋に於て客に侍した事にある。つまり今の二札鑑札女子が待合に出掛けるが如くである。古から、藝者と女郎は素足をもつて誇り(?)としてゐたが、こゝの子供は、冬だけは足袋を穿いた。又、雨天の日は、子供屋から茶屋に行く時、衣類の上に合羽を羽折つて行つた。

深川の羽織

新吉原の廻し部屋落語五人廻しの畫（文化文政？）



この畫は、柳葉亭繁彦著の「蓮華往生鮮血臺」（明治十八年改進新聞へ連載した小說）の口畫である。この小說は、天明年間（十代將軍家治の頃）に、上總國一宮に於て、中山の僞行者奸僧養道なるものが、時の無智な迷信的なる民衆を蓮華往生なる奇計を以て（迷信者を大往生を遂げさせる、極樂へ導くと詐稱し、唐銅の葉の蓮華臺に坐らせ廿餘人の法師その前後を取かこみて讀經し、その騷聲のうちに無頼漢槍を以て尻より突殺し、床下へ引下すしかけである。）欺き、盛んに惡錢を得てゐるのを一ノ宮の侠客法華大助なる者が知り、その罪惡をあばくといふスジだ。その後この蓮華往生なるものは東京の目黒その他にもあつたといはれるが、眞疑の程は分らない。



解説

文化文政頃の狂歌師。この暢氣な有樣を見よ。右より新泉園鷺丸。梧桐園糸杜　文寶舎玉丸。
蝶々亭如柳　文臨舎繁躬　寶市亭我成

粋客名妓

又、十八大通の如き粋客や、富豪の遊蕩兒や、菱川、西川、歌川の流をくむ浮世繪師や、變態的花街作家や、高尾、薄雲、勝山、瀨川等數多の名妓や華々しい任俠の徒を生んだのもこの時代だ。この時代の新吉原及その他の遊廓の發展も素晴らしいものであつたが、又私娼(岡場所)の全盛はやゝともすると、公娼を壓服して(幕府の酷法も何らの效なく、寛政より天保へかけては大隆盛を致す)猖獗を極めた。

岡場所

ところへ、又、この期に踊子、藝者(踊子は天和年間に既に發生。吉原の藝者の始祖は寶曆十二年扇屋に出た歌扇。京都は寶曆元年島原に現れたのが最初。大阪新町は天和年間。)なるものが古の遊女の歌と、白拍子の舞と三味線音樂との三拍子を以て生じ、大いに持はやされた。

三拍子

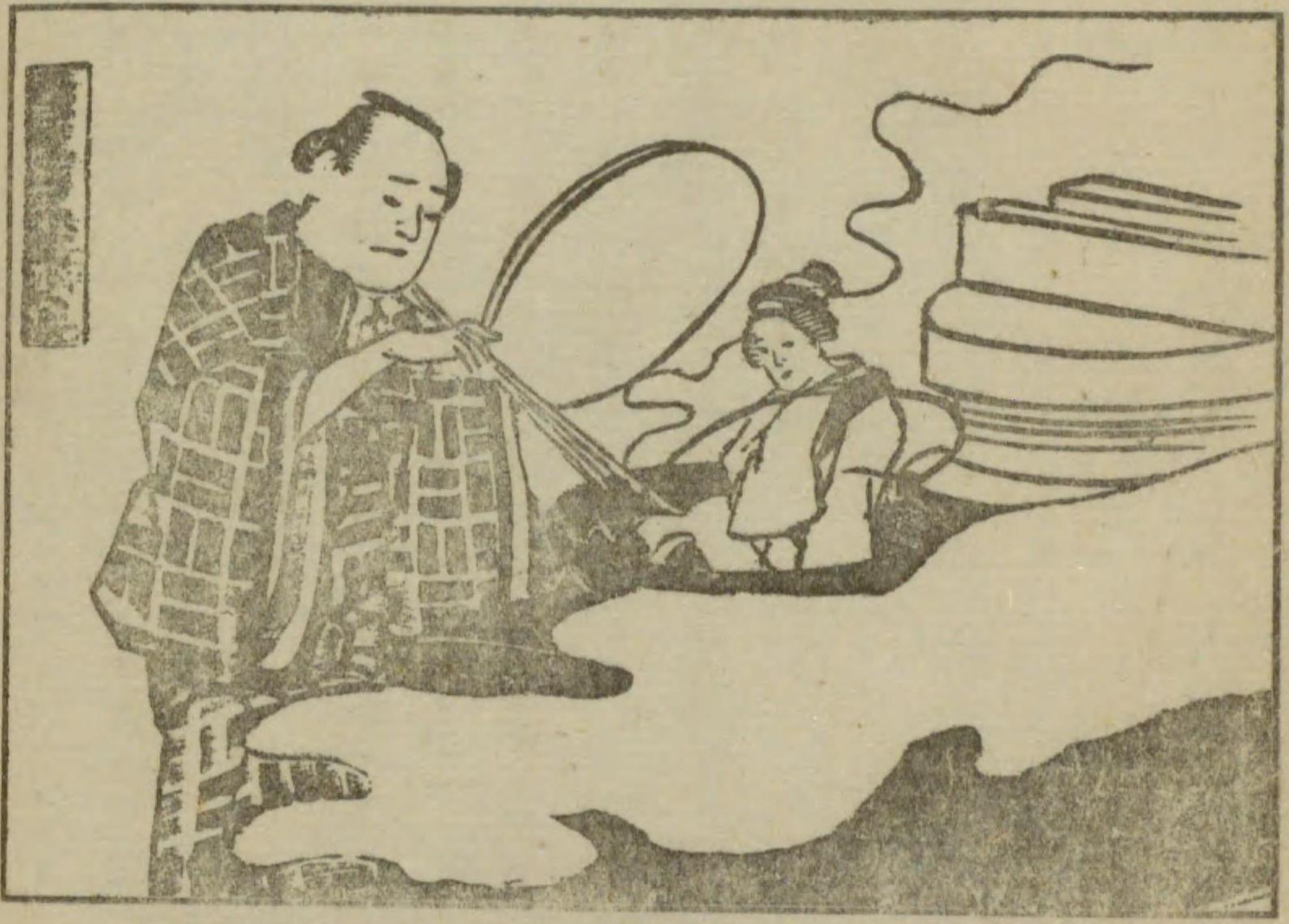
深川の藝者はこれを羽織と云ひ、もう一つ遊女の務めもやつた。『蜑の燒藻』の一節に『又女藝者といふもの殊に流行りて、下町山の手いづくとも差別なく、少しく眉目よき娘はみな藝者にしたてたり』と書いてある事でも、彼女らの全盛が知れよう。この花街全盛に附隨して寄生したものに幇間(男藝者)なる變態物がある。又、このらん熟期より、德川末期に盛えたものに歌舞伎芝居、博奕がある。又、社會の當面に活躍をした變態人情者に、無頼漢、掏摸、義賊、毒婦、仲條流の女醫者(子おろし等。)刺靑師、春畫師、惡僧(時の民衆に隨分無智で迷信的なものが多かつたから。挿畫の蓮華往生の如きは其一例だ)等がある。

一般の女性

こゝで一寸述べて置きたいのは、この時代の一般の女性の生活である。世の中は斯くの如く淫蕩でも、一般の女性には、儒教的道德と、社會的制裁に阻迫されて、自由な意見と自由な選擇にもとずく、戀愛はゆるされてゐなかつた。寧ろいよいよ男子の私有物となり、家庭の奧深くとぢこめられてゐた。

金で買はれる女の意地

この間に、彼の金で買はれる階級の女達が、却つて自由で純情的な戀をし女性の意地をもつてゐたといふことは、可



（上）娘を公娼、私娼、藝者等にして食べる親

（下）親のすねをかぢるどら息子。

「これは當時の漫畫である」

成り面白い事である。

又、將軍の話に戻るが、十一代家齊は、妻妾の子供無慮五十一人の多きに上つた。所が、彼はその子供を處分するために、蟲のいゝ事を考へ、閣老の手を借り、諸大名へ向つて養子及び降嫁の押賣をはじめ、あまつさへ子女緣付の調度金をあみ出すため頂き手に對して、幕府の節儉政綱とは反對な、出來るだけ華美上等な献品を催促した。彼は、餘り子供を亂造して、頭が矛盾して了つたのだ。

四　幕末の人情

幕末の人情は、種々な意味で、變態的デカタン的だ。永い間の泰平で、民衆の精神的肉體的生活は靡亂の極に達し、新らしい刺戟、異常な刺戟を求め、その刺戟の中で、夢の浮世の刹那的享樂にひたつた。この間に外國の思想的、經濟的、政治的刺戟が起り、又、國内に於ては勤王運動が漸く盛んとなり、德川の權勢の滅亡も益々近づきはじめたので、うつぼつとして新人情勃興の機運が見えはじめた。幕府は、常に不安と焦燥を感じ、民衆は何か一大變事の起りさうな不安と、新人情勃興に對する黎明的驚異の瞳を瞠つた。かくて、明治維新が來た。

187
510

このところにはっこうしよ
のけんいんなきはにせはん
なりもしけんいんなきもの
あつたらおしらせください

文藝資料研究會印

大正十五年九月十五日印刷納本
大正十五年九月二十日發行

著者 井東憲

東京市牛込區赤城元町三十四番地
發行兼印刷人 樋田悦之

發行所 文藝資料研究會

187
510